



はやい日足に急かされながら  
アルプスの稜線をたどる

群青の空、張りつめた冷気  
三日月の透き通った輝き

細い円弧の妖艶なかがやきが  
地上に刺さってくる

弧を形作るのは地球の影  
けれど、いのちは映えない

## 第 71 次訪問団報告



9月28日、朝8時には、開通するはずだったJR中央線が午後になっても全面不通のままだった。前日から東京入りしていた松澤先生と神谷は、夕方動き出した中央線の到着ホームを、中澤先生をさがして駆け回った。第71次訪問団はこんな風に始まった。お二人の先生の終始冷静な対応に事務局は感謝したい。

第 71 次訪問団報告 5

特集 チェルノブイリの祈り 13  
—いくつもの出会いを残して—

第 72 次訪問団報告（速報） 28

私たちとチェルノブイリ 29  
—高校生、文化祭での取り組み—

那珂町通信 40

この前 ライラちゃんに 会った時のこと 42

連載随筆「ヴェーチナエ ディハーニエ」＜宮尾彰＞ 44

ジーマのロシア小話 46

振替用紙のメッセージから 48

ベラルーシの食卓 51

ありがとうございました 52

出会い Встреча 54

モスクワ便り 59

ニュースクリップ 60

Здравствуй те!（事務局広場） 62

本の紹介 Book review 64

「アレクセイと泉」上映予定 66

第 5 回「永井隆平和記念・長崎賞」受賞決定  
事務局日誌 67

## マリアへの臍<sup>さい</sup>帯血移植

中沢 洋三（信州大学附属病院小児科医師）

2003年10月3日にファンコニー貧血という先天性の造血障害を持った5歳の女の子マリアに、ベラルーシ共和国で初めての非血縁者間臍帯血移植が行われました。

この病気は成人を待たずに高率に白血病を発症するため、早い時期での造血幹細胞移植が必要になります。ファンコニー貧血は移植の前処置に用いる抗がん剤や放射線に対して弱い体質を持つため、移植が最も難しい病気と考えられています。

移植の成功率を高めるためには、抗がん剤の投与量と放射線の照射量を最小限に抑えられる家族からの移植が望ましいのですが、マリアのHLA（ヒト白血球抗原）型は家族と適合しませ

ませんでした。ベラルーシには骨髄バンクがないため、ヨーロッパと日本の骨髄バンクからマリアに合うドナーが探されましたが、HLAの適合したドナーが見つからず、日本の臍帯血バンクのマリアに比較的近いHLAを持った臍帯血が移植片として選ばれました。

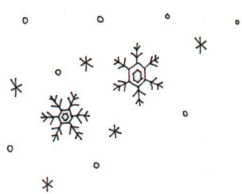
ベラルーシではこれまでに、ヨーロッパバンクからの骨髄移植が二例行われていますが、臍帯血バンクからの移植経験がなかったため、移植当日は現地に私が行き、ミンスク小児血液がんセンターのユリーヤ移植部長と二人で移植にあたりました。マイナス180度に冷凍されていた臍帯血を解凍し、マリアの体内に移植し、日本で開発された免疫抑制剤（FK506）

を日本から運び、その濃度測定システムを現地で立ち上げ、投与を開始しました。

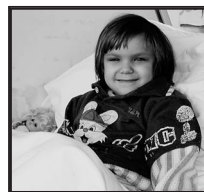
移植術は無事に終了し、私は帰国したのですが、その後もなくなり、この病気の移植で最も問題となる粘膜炎害に起因する細菌感染症が発症しました。私たちはすぐに抗生物質を日本から送り、衛星通信を用いて連日連絡を取り、治療にあたりましたが、残念なことに臍帯血の生着を待たずにマリアは亡くなってしまいました。

大変残念な結果になってしまいましたが、ベラルーシにおける初めてのバンクからの臍帯血移植、今後の移植の中心となる新たな免疫抑制剤の投与システムの導入、衛星通信を通じての医療協力の経験を、残された難病を持ったベラルーシの子ども達に活かしていきたいと思います。

この場をお借りしてマリアのご冥福を祈りたいと思います。



さようなら マリアちゃん



今年度チェルノブイリく10>ドリームズで呼びかけ、全国のたくさんの方から応援していただきましたマリア・クリシタポービッチさんが、10月18日亡くなりました。

日本人にHLAの適合者が多くいるということで、ベラルーシ国立小児血液がんセンターから依頼を受けました。とても難しい治療に、ベラルーシ・日本両国の医師が最善を尽くしてくださいました。

センターの医師は経験十分で、移植はスムーズに進んだのですが、感染症にかかり10日間厳しい状態が続きました。

本当に残念です。「なんとか助かってほしい、なんとか…!」との祈りも届きませんでした。マリアちゃんに付き添い、励ましていたおばあちゃん、仕事の合間に駆けつけていたお母さんの痛みを思うとつらいです。でも、今は、マリアちゃんは、さまざまな苦しい治療から解放されたんだね、と思います。

短い時を生きたマリアちゃん

わずかな出会いは

命は限りあるものと

私たちに教えてくれました

あなたの微笑みが、心の中で繰り返されます

これからは、あなたが、私たちに添ってください



## 新生児支援 継続支援を通じて、確かな手応え

松澤 重行 (信州大学医学部小児科)

私にとっては今回が4回目の訪問であり、JCFから支援した医療機器の問題点の確認、ゴメリ州の妊婦、新生児の医療事情をもう少し把握して、今後の支援の方向性を検討すること、妊婦の被曝と胎児への影響についての研究の準備、などを目的として渡航しました。

出発の前日に、新宿のカタログハウス社において年1回行われるチエルノブイリ支援グループの交流会に出席し、ベラルーシの新生児医療の現状についてこれまでの経験をお話させていただく貴重な機会をいただきました。そして、「チエルノブイリの子どもたちの身体的および精神社会的影響に関する第4回国際会議」に出席された広島大学名誉教授の佐藤幸男先生から、被曝者やリクビダートル(除染作業者)を親に持つ子どもたちに種々の疾患が増加しているとお話をうかが

い、まだやらなければいけないことはたくさんありそうだ、と勇気づけられました。

はじめてのベラルーシの秋は、どこまでも空青く、木々の葉が彩やかで、静かでした。ゴメリに着いてまず州立病院のカシム院長、スベトラナ副院長(附属産科病院の院長を兼任している)を訪問しました。JCFから新生児病棟に贈った機器は大切に使用されていました。とくに超音波を用いた頭部検査は、今年1月から9月の9か月間で195名ものこどもの検査を行い、診療上の参考にしたとのことでした。ベラルーシでは検査診断のためには一定時間の講習を受け資格を得る必要があります。昨年、病院に資格を持つ医師が1名しかいませんでしたが、贈った機械が入ったことで、この資格を得るために交代で出張し講習を受けていました(今年末には有資格者が4名にな



る。「とてもうまく利用できており、ありがたく思っている」、とのことばに、こちらこそ有効活用してくれてありがたい、と少し胸が熱くなりました。

産科病院では、国の予算がついて屋根の修理を行っており、このあと病室の水まわりとか、壁の防寒などを直す予定とのこと、少し施設がよくなりそうな状況でした。しかし、新生児を診療する上ではまだまだ多くの問題があり、一例として、新生児に使用できるサイズの点滴留置針(中心静脈用)がなかったり、成人用の血液検査機器しかないために血液検査に大量の採血量を必要とするなど、今の日本では考えられない状況が続いています。また、発達障害児の増加の原因の一つは胎児期の異常とその発見の遅れにあると考えられますが、彼らは、振り返って見直してみると、胎盤臍帯などの胎児情報がないために結果的に間違った判断

をしてしまった例がときどきある、と言っていました。胎児用超音波、胎児心拍モニターがあればもう少し適切な状況判断ができると思う、という彼らの話は、これまで私たちが訪問のつど話してきたことでもあったので、私たちの意図するところが彼らに少しずつ伝わったのかもしれないと思いました。病院の生命線ともいえる衛生面に關して、現在の殺菌、滅菌装置には問題があつて、とりわけ新生児に対しては心配である、との院長のお話は(これは私たちへのリクエストとしての発言ではありませんでしたが)真に的を射たものであると感じました。

前回の訪問報告でも触れましたが、ベラルーシの低出生体重児(未熟児)の発達障害の増加は深刻な問題としてとらえられています。このことと放射能被曝との関連がどの程度あるのか、現時点ではなんとも言いようがないの



で、この報告ではあまり触れませんが、小児科医として個人的には非常に気になる問題です。少なくとも、私たちの新生児医療協力が、ただ生存率を上げることが目標にし、神経障害を残す子どもが増加してしまうことになってはいけないと思います。ゴメリ州立病院では、院長が今年4月にイギリスの障害児施設などの視察に行き、ベラルーシの周産期体制の遅れ、リハビリ施設の絶対的不足、障害児に対する教育の必要性とそのため制度の欠如など、国のシステムが大きな問題を抱えていると感じた、と語っており、このよう

なことからも、このことが国家的問題になりつつあることを感じました。低出生体重児に神経後遺症が起きる原因は多彩ですが、ベラルーシでは何が原因になっているのか、実はわかっていません。州立病院で産まれた子どもの定期健康診断を行うなどして、発達障害の原因に迫るだけでも子どもた

ちの発達予後の改善につながるのではないかと思うのですが、今の彼らにはそのような経済力も技術も制度もないようです。

翌日、ゴメリ州チエチエルスク地区病院を訪問しました。これは、中核病院以外の地域病院の周産期医療のなかに、むしろ簡単に医療支援して成果をあげられることがあるのではないかと思ったり、高汚染地区で話を聞くことによって、被曝が新生児におよぼす問題が見えてくるかもしれない、と考えたからでした。結論から言うと、その当では外れました。この規模の地区病院では分娩は年1700〜1800件で、基本的に正常分娩のみを対象としています。異常があればゴメリ州やミンスク州の州立病院に母体搬送し、地元に残った正常分娩には産科医、助産師、小児科医、小児科看護師が立ちあふ必要な処置を行う、という手堅い診療体

制を整えており、分娩前後に大きな問題が起こる可能性は低いと考えられました。また、現場の医療者の話を聞く限りでは、女性の被曝と新生児の異常には因果関係はうかがえませんでした。

産科の先生と意見交換したが、彼女は非常に丁寧に対応してくれました。しかし「原発事故後、外国から多くの人が支援や視察に来たが、この国の医療問題を誰もが原発事故を通してしか見ていない。今のベラルーシの医療上の問題は、事故の直接的な影響よりもはるかに他の問題が原因になっているのに」とのことは痛烈でした。この国の医療問題は被曝にある、という切り口で関わってくる医療関係者に対して、この国の医療の問題を理解していない、とする批判的な面がみえた思いました。私は彼女らの言う「問題」を理解していたので、そのことをきちんと伝えましたが、放射能被曝と人間

の健康をテーマに活動が続けていく姿勢とともに、相手のことをよく理解しようとする謙虚な姿勢もまた忘れてはいけない、と改めて感じました。

出国前日にゴメリツォリストホテルのロビーにゴメリ医科大学産婦人科主任のエレーナ・バラノウスカヤ先生が訪ねてきてくれました。8月に松本を訪れ、3日間、県内の産科小児科施設を視察された先生です。

信州大学小児科では、胎盤の被曝量と胎児や胎盤との関連についての研究を計画しています。大地や樹木、農作物に入り込んだセシウム137などの核種による体外、体内の低線量被曝はいまだに続いていると考えられますが、原発事故後の急性期以降は胎盤の汚染についての検討は行われていません。今後、状況が整えばぜひ解明したいテーマだと思います。エレーナ先生は私たちとのこの共同研究に非常に興



## 特集

# チェルノブイリの祈り

—いくつもの出会いを残して—



10月15日、松本市あがたの森文化会館講堂



味をもっています。また、エレーナ先生と州立病院のステトラナ副院長は交流が深いようです。新生児の医療支援、基礎研究を行う上でも、人間の輪がつくられ始めた手応えを感じつつあります。

今回の訪問の全体を通じて、(これまで何回か交流をくり返したことで)今回は同業者として肩の凝らない話ができるようになってきたことは自分にとっては嬉しいことでした。物的支援についても、最初の頃はリクエストが強く、支援慣れとか無い物ねだり的なところがあるような気がして、こちらも物的支援以外の支援の方法を躍起になって考えているようなところもありました。しかし、周産期医療にはこれまでほとんど支援の手が入っていなかったこともあり、彼らは設備面以外だけでなく、技術面、情報面でも非常に渴望しているのではないかと考えるようになりました。

これらをふまえて、最後に、これらの新生児医療協力について。やはり現場をみると、まだまだ設備、機材の不足が目立っており、少しずつでも医療品支援が続けられていくことができれば、と思います。また、診断、治療についての医療情報をこちらから選んで提供することで、医療技術面での向上に協力したいと思えます(ペラルーシでは限られた医療者しかインターネットを利用しておらず、医学書籍も少ない)。また、計画段階にある胎盤の被曝量と胎児や胎盤との関連についての研究が始められれば、と思えます。このような医療協力を続けることができるのも、ご支援いただいたみなさまのおかげと、感謝しております。また、新生児医療協力についてのご意見がありましたら、ぜひお聞かせ下さい。今後も、ささやかですが関わり続けたい、と思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

## チェルノブイリの祈り

ベラルーシでチェルノブイリ事故の除染作業に関わった消防士や汚染地に暮らす人々から聞き取りをし記録した「チェルノブイリの祈り」の著者スベトラーナ・アレクシエービッチさんが来日され、国内のチェルノブイリ支援団体が連携し合って、全国で講演会が開かれました。

JCFは10月15日、松本市あがたの森文化会館講堂でJCFセミナー「チェルノブイリの祈り」を開催しました。

第一部は、アレクシエービッチさんとJCF理事長鎌田實のトーク、第二部は神田香織さんの語る講談「チェルノブイリの祈り」というプログラムのセミナーには、平日の夜にもかかわらず、280人を越す参加者で満員の盛況となり、たくさんの反響をいただきました。またこのイベントには松本市内三校の高校生が準備会から運営に参加して、当日も多数の高校生が熱心に耳を傾け、感想を寄せてくれました。

このセミナーの様子を報告いたします。

僕たちにとって、遠い国ベラルーシ。1986年に起こったチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故で、人々は幸せの感覚を失った。「子ども達が、白血病で苦しんでいる。日本の進んだ医療で何とかして欲しい」との依頼を受け、チェルノブイリに向かったのは、1991年1月だった。

ロシア・ウクライナ・ベラルーシを回りながら、事故直後の除染作業に動員された兵士や消防士の多くが苦しんでいる、と聞いた。原発周辺30キロ圏内はゾーンと呼ばれ、住民は強制移住させられた。汚染は南風によって、白いロシアと呼ばれるベラルーシ共和国に広がった。原発から200キロ離れた地域にも、風で運ばれた放射性物質がフォールアウトし、移住勧告の後、地図から消されていった『埋葬の村』がある。

病院や医療センターに行くと「日本に、子どもを連れて行ってほしい。日

本の医療で治してほしい」と、付き添うお母さんやおばあさんが訴えてきた。

JCF/日本チェルノブイリ連帯基金は、日本中のたくさんの方々の応援を得て、最も汚染のひどかったベラルーシ、ゴメリ州の子ども達の甲状腺健診・白血病治療、そして小さなボレーシエ学校の健康診断に取り組んできた。子どもに付き添い、日々の生活と闘う家族の皆さんと会うとき、この地には、つましく素朴な暮らしをつないできた何百万の人々がいる、と気が付かされる。

スベトラーナ・アレクシエービッチさんは、名も無き市井の人々の声を丁寧しぜいに聞き取り、まとめられた。それが「チェルノブイリの祈り」です。

無念の死を遂げた消防士の妻の悲痛の叫びが聞こえてきました。埋葬の村で隣人の安否を問いかけてくるサマシヨールがいました。汚染の村を去れ

ず、住んではいけない危険な地帯に居座るサマシヨールはわがままな人だと聞かされました。皆、心を寄せ合って、暮らしていたのです。

彼らのつらい記憶に耳を傾けたスベトラーナさんとは、どんな方なのでしょうか。

彼女の別の著書の扉にこんな言葉を見つけました。「たとえ子どもであろうとも、かれらの犠牲の上に社会の繁栄があつてはならない。ドストエフスキー」。私たちは、初めてチェルノブイリの被災地を訪ねた時、ソ連科学アカデミーの教授が語った言葉を忘れることができませぬ。「一粒の子ども

の涙は、全人類の悲しみより重い、いま、チェルノブイリの子ども達が泣いています。私たちだけでは救えない。日本の人たちに期待しています」奇しくも同じ言葉に、心を揺さぶられ、チェルノブイリに関わり続けてきました。

原子力発電所開発史上最大と言われる大事故が、そこに住む一人ひとりの人間にとって、どんなに辛いものだったのか。汚染の数値だけではわかりません。病気の発症数だけでもイメージできない。生きた情感を共に受け取ることが、今を知り、記憶を未来への想像に向かわせるエネルギーに変えていくでしょう。

13年間の支援・協力活動を通して、私たちは、チェルノブイリの悲しみを学んできました。救援活動をしながら、自然・環境・命・家族・人間の絆等たくさんのことを学ばせてもらいました。ぼくらは、これから僕らの住む地球を大切にしていきたいと思えます。子ども達のために地球を大事にしたいと思えます。

(JCF理事長・鎌田 實)

## 第一部 トーク&メッセーじ

□鎌田 實

■スベトラナー・アレクシエービッチ (通訳・竹内高明)



□スベトラナー・アレクシエービッチさんは、ウクライナ共和国に生まれました。ご両親はベラルーシ人です。アレクシエービッチさんは、「戦争は女の顔をしていない」という本を書かれています。子どもや大人の目から戦争を見て書かれたドキュメントです。これは体制批判ということで出版禁止になりました。ところが多くの人が読みたいと言われ、2年後に許可され、今は200万部出版されています。また、旧ソ連がアフガンに侵攻した時の兵士の家族の視点から「アフガン帰還兵の証言」を書いています。体制批判をしづらい国にあって、きちんとしなければならぬ時にしている。彼女はそれが作家としての使命だと言っています。

■日本に来て、1週間経ちました。先ほど少し休みましたので元気です。今日、北海道から戻ってきました。そこには泊原発があつて、チェルノブイリと同じようにとても美しい所がありました。今、原発が在るところは、かつて教会があつたような美しい場所です。

□ドキュメントという方法にこだわるのは、何か理由があるのでしょうか。

■私は職業をジャーナリストとして出ました。たくさんの人に会って話を聞きました。その中で、人々はそれぞれに物語があるのではないかと、それもある有名な人々ではなく、名もなき小さな人々の話は、ドストエフスキーも著し得なかった物語を持っているのではないかと思いました。

□スベトラナーさんは、チェルノブイリから人類は何を学んでいかなければならないと思われませんか。

■私は、事故後初めて原発に入ったとき、人々は呆然としていました。つまり、人々は今までに経験したこともなく、何をどうしていいか解らなかつた。中央のソ連邦政府は科学者を現地に送

り込んだのですが、彼らもどうしていいか解らなかつた。何もないと報告しておけばいいと思っていた。つまり今まで経験したこともなかつた。

原発のプリピャチの人々は原発の火事を見て、それが美しいと思っていた。事故報道についてはだれも理解していなかつた。まったく新しい現実の中にベラルーシという国が投げ込まれた。そういうものが個々に現れていることを書かなければならないと思いました。

旧ソ連邦は核戦争を想定してきましたから、我々はそういうものを準備してきたわけです。我々は、核戦争と原発の平和利用を分けて考えていたわけです。例えば、旧ソ連邦の学者アレクサンドロフは、原発を考えました。サハロフは平和利用を言っていました。

しかし、今日では戦争の利用と平和利用は意味は同じではないかと言えらると思います。

「チェルノブイリの祈り」は10年かかって取材して書いています。彼女は

この本でチェルノブイリのことを語っていない。チェルノブイリ以後変わった世界、21世紀の人類の挑戦について私は書きたかつた、と先ほどお聞きしました。

■日本に来て、1週間経ちました。先ほど少し休みましたので元気です。今日、北海道から戻ってきました。そこには泊原発があつて、チェルノブイリと同じようにとても美しい所がありました。今、原発が在るところは、かつて教会があつたような美しい場所です。

□今、アレクシエービッチさんはパリに住んでいますね。

■イタリアに2年。パリは半年です。

□ベラルーシでは、またアレクシエービッチさんには発言の機会が与えられないのでしょうか。

■私の「チェルノブイリの祈り」は、すでに17カ国で翻訳されています。ベラルーシではまだ出版されていません。ルカシエンコ大統領はまだこれが有害な本であると言っています。全体主義体制に戻っている。民主的な考え方をする人々が消されてしまっています。

□ルカシエンコ大統領を横に置いて、今のベラルーシをどう思いますか。





■チェルノブイリは非常に大きな問題です。ベラルーシはチェルノブイリの実験場になっている。未来の中に投げ込まれているのだけれど、国民の意志は止まったままです。このために外国から批判され、孤立したままになっており、国は実際停滞しています。

チェルノブイリの影響で病気が増えている。チェルノブイリの問題は遺伝的に世代を越えて現れると言ってもいいでしょう。ベラルーシの国民は遅れてきた国民、独立した国民として、発達もしていない。独裁的な大統領を選んできました。そういうことでも、遅れた国民であると言えるでしょう。

チェルノブイリは忘れられつつあると言われていますが、そうではないと思います。未来の物語と言われているチェルノブイリは、そのまま現実に理解されていないのです。チェルノブイリによって、過去と未来、外国と国内という二項対立が成り立たなくなっています。

放射性物質の被害によって、ベラルーシの国内外、そして、将来何世代も影響を受け続けます。ベラルーシは一番大きな被害を受けたことになりません。

チェルノブイリは新しい挑戦です。それまでに蓄積していた戦争、悲惨な体験、その他の知識は挑戦に対して何ら助けになりません。

チェルノブイリと言うものを、広い意味で捉える必要があります。原子力、そして、政治、医学的にだけではなく、

□チェルノブイリの汚染地帯、地図から消された埋葬の村を歩いているとまるで電氣を使っていないお年寄りが戻ってきて暮らしている。大都市では、電氣をふんだんに使っているが、自然に囲まれて質素だが豊かに暮らしている人たちを見てきました。

その人達の暮らしが一夜にして壊れてしまったのですが、スベトラナさんは、この不公平感についてどう思いますか。

■不公平はあると思います。というのは、農民は昔から自然に暮らしてきて、鋤や鍬を使って暮らしています。現在の物質、唯物論的生活にまったく関係なく暮らしています。しかし、ベラルーシの汚染地に200万人が住んでいて、その内50万人が子どもです。そして、もつとも汚染のひどかった500

我々ひとりひとりの世界観として捉えることができます。見た目はこれまでの世界と変わらないように見えるのですが、人間と自然、これまで人間は自然と共存して生きてきたのですが、自然が人間に牙をむきだしている、そういった問題と向き合っています。

生態系が変わってしまったということです。放射性物質は、目に見えない、においもしない、手で触ってもわかりません。人間の感覚器官が人間の助けにならないのです。文明と人間の蓄積してきた科学が人間の助けにならないのです。汚染地の人々はこの状況を見たことがない。人間が作ってきた文明を人間自身ができることもできないわけです。

チェルノブイリが多

の町村から移住が行われました。政府が国際的に孤立して、補償ができませんから、他の国のNGOなどから支援を受けているのですが、それは十分ではありません。

□アレクシエービッチさんより汚染地帯を歩いた物語をお聞きます。

■先ほど申しましたように、日本人、ベラルーシ人は類まれな経験を持っていません。核戦争は原子力の平和利用ではありません。ウクライナ・ベラルーシの体験は、平和利用の原発による被害です。

ベラルーシにまき散らされた放射性物質は広島型原爆の250倍、たと言われています。放射性物質の半減期は、数千年、数万年、ものによっては数十万年になります。人間と放射性物質との戦いが、今もこれから数万年も続くと言っています。

くの哲学的問題を引き起こしています。キリスト教には、人間は万物の霊長という考え方がありますが、チェルノブイリ以後はその考え方が覆されました。

移住の時、人々の乗ったバスを置き去りにされた豚や牛がじっと見ている。私もそういう人々の話を聞きましたが、目を合わせるのが恐ろしい。動物を残していくとき、その目はとても



講演の翌日、アレクシエービッチさんと通訳竹内さんを松本城にご案内



自らチエルノブイリ人になってしまった。他の民族とは違った、別の特殊な民族になってしまったかのようです。人類の知識が蓄積されてきたわけですが、そこにいた人々は、他の人々と同じような生き方ができない。たまたま、原発の近くに住んでいて、風が吹いて、汚染されてしまったという、それだけのことなんですね。例えば、飛行を記録しているブラックボックスと同じように、ベラルーシ国民は、チエルノブイリの実験場で起こっていることに自分たちの身体で記録して協力している。そういうことをいう人もいます。

悲しいと言われています。たくさんの人々は、自分の飼っていた犬やネコの名前を書き残していきました。兵士がそれらの動物を射殺していったのです。ネコや犬の共同墓地があります。人間はそれだけのことをする価値を果たして持っているのでしょうか。それは大きな問題です。チエルノブイリという実験場であって、ベラルーシ人は

二つの破局が同時に重なりました。チエルノブイリ事故とソ連邦の崩壊です。社会主義の権威、ソ連が崩壊し、ベラルーシは独立しました。ベラルーシは、ずっと他国に従属してきたという歴史があります。独裁的な体制に

なっていました。ルカシエンコ大統領の下で、チエルノブイリの真実を究明するために、たくさんの方々が研究しています。彼ら個人の勇気が必要です。勇気を持った人々が、チエルノブイリの真実を話す機会がもっと増えるべきでしょう。そのような人々の努力によって、真実が少しずつ伝えられます。チエルノブイリというこの世界を変えてしまう出来事、人間にとって世界を変えてしまう出来事が同時に起こった中で、皆さんがなさっているような各国からの救援に、私はとても感謝しています。

自分たちに起こった事を理解しようとするときに、科学とか数学、物理が人間の力になるのではなく、ただ一つの全き言葉、「人間の愛」がこれからの人たちの拠り所になっていくだろう、と私は本の中で書こうとしました。

## ◆アンケートから◆

ス ペトラーナ・アレクシエービッチさんのチエルノブイリをめぐる洞察は、21世紀の人類のあり方の根源的なものにかかわっています。万物の霊長の座から転落した人類が、自らのつくり出した自然の異変に未来永劫報復を受けることになるという言葉は、私の心に重く響きました。そして、それでもなお、人間の希望を愛や子供たちのまなざしに求めるといふアレクシエービッチさんの言葉に、私は心から感銘を受けました。

そして、彼女の哲学の核心を見事に舞台化したのが神田香織さんの講談でした。言葉とまなざしにこれほどの迫力をもった俳優には滅多に出会えません。現代の名優だと私は思いました。すばらしい一晚をくださったJCFに心から感謝します。

小川 幸司 (37歳)



フィナーレでアレクシエービッチさんと神田さんに花束を贈呈

アレクシエービッチさんの生の声を聞かせていただけたという本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。

短い時間ではありましたが、ご本人のその場での生の声、生の思いを自分の耳でとらえることができるという体験は滅多にないでしょう。このような

機会は、難しいとは思いますが、是非とも増やしていただきたいと思います。

また、神田さんの講談も、さすが、すばらしいものでした。一字一句聞き逃すことのできない、絶妙な語り口に、心をすいこまれてしまいました。

心の中にストンと入ってきて、涙が止まらず、その場に今、自分の存在があるかのように、始まりから終わりまで、時のたつのが全く感じられませんでした。講談というジャンルを超えて『伝えたい』という思いがひしひしと伝わり、『ああ、このような表現方法もあるのだな…』と新しい発見を得られました。本当にありがとうございました。機会がありましたら、もう一度拝見させていただきます。

豊原 彩香 (16歳)

**照** 明の操作をさせていたいただきました。また、松本深志高校の演劇部のものです。

アレクシエービッチさんの話は、シヨックなことばかりでした。「チエルノブイリの祈り」を読みたかったのですが、残念ながら、大人気だったためか、売り切れてしまっていたので、又、本屋さんで、探してみようと思っています。

神田さんの講談は、アレクシエービッチさんの話とは一味違った良さがあつたように思います。効果的な音と光で、言葉の力が倍増して、心のなかに飛び込んできたような感じでした。とても聞きやすく、すんなりと神田さんの世界に浸れました。

とても充実した2時間半をありがとうございました。

より多くの人の感動を産み、より多くの被曝者が救われる事を祈っています。

小澤 奈々（17歳）



しき、苦しさは本当に心が痛み、ときには耳をふさいでしまいたくありません。普通に生きていたら幸せに暮らしていたはずの人々が突然見知らぬものにまき込まれてわけもわからず死んでいき、残された人も幸せにはなれない。

**ス** ベトラーナさんのお話ではチエルノブイリの原発事故について、またベラルーシの現状について様々なことを知ることができました。今まで医療方面から主にこの事故を考えていたので、国の様子や、権力についても、また農民の方々の暮らしなど私にとつては新しく知ることが沢山あつて、とても勉強になりました。

・スベトラーナさんが「忘れられる」のではない。正しく理解されていないのだ、という言葉がとても印象に残っています。

・神田さんの講談では、号泣してしまいました。事実を懸命に伝えようとしている活動がすごいなあと思います。

・講談を見るのは初めてだったので、本当にひきこまれました。ありがとうございました。

苦しんでいる大切な人を目の前にしてふれることも許されないということはどうれほど辛いのか想像もつきません。祈りが本当に誰かに届いてチエルノブイリが救われたらと思います。なにぶん学生で立派な支援もできませんが一生懸命祈っています。今日は本当にありがとうございました。

伊藤 萌（15歳）

**私** 達がちょうど産まれた年に起きた大きな事件を、国家の圧力にも負けず世界中に訴えようとする勇気で、誠実で強い女性。本物のアレクシエービッチさんにお会いして、心からこの出会いに感謝したいと思いました。悲しいことに、この事件は風化しつつあります。

私達もさほど多くを知っているわけではありません。しかし、この歴史的概念に包まれているこの事件にも、そこには一人一人の生活や愛や未来があつ

**私** には目に見えない、臭いが無い、何も感じられない放射能を浴びただけで、病气や障害、死ぬなんてことは今だに信じられない。しかし、そのようなことを信じなくては、ただの無責任、自分勝手になる。

チエルノブイリ原発事故は事実でもう取り返しがつかないのだけれど、その被害をもう広げないように、日本人が「島国の人」という思想から抜け出すべきだと思つた。

近藤 広樹（16歳）

**教** 科書に「チエルノブイリの原発事故」という一文をみつけたとき、私はその重さを全然感じていませんでした。

なので今回このような場に参加できて本当によかつたと思っています。アレクシエービッチさんや神田さんから伝わってくるチエルノブイリの人々の様子や町や自然の状態の悲惨さ、悲

たことを忘れてはならないと思ひました。

自らの過失による死でなく、他人の過失による死ほど辛いものはないと思ひました。そして、その死によつて残された家族も辛いではすまされない思いが残ることも。

他に流されず、自分の信念にひたすら生きることがどんなに難しくても、なに美しいものなのかを見せつけられた感じがしました。とても有意義な2時間半でした。

神田さんの視線はものすごく強く、惹きつけられてしまいました…。ありがとうございました。

武居 みなみ（17歳）

**千** エルノブイリの原発事故があつたことは知っていましたが、その土地の人々がどんなに苦しい思いをしてきたかをトークや講談で強く感じる事ができました。

トークで一番印象に残ったのは疎開する人達がペットを残していかなければいけない辛さを思うと涙が出そうになりました。

講談は迫力がすごくて、情景が目に見え、浮かぶようでした。

山田 智美 (16歳)

## 私

私は、今まで広島・長崎の原爆や、チェルノブイリの原発事故について深く興味をもつて知ろうとしたことはありませんでした。なのでこの講演を聞いて驚くことはたくさんあり、とてもショックを受けました。原爆はいくつかの資料を見たり、テレビや話を聞いて、大変なことなのだろうなとただ漠然としたものがあつたけれど、原発事故の危険な度合いとか、放射能だとか、それを浴びた人々はどのようなになったのか、詳しいことは何一つ知らず、そんなに大変なことではないのだろう、とさえ思っていました。神田

太谷 亜希

香織さんが「チェルノブイリの祈り」を講談でやったのを見て、そんな私でも、一つ一つの情景が頭の中に描かれて、実際に直面した人の悲惨さや、その周りの人々の愛情などが痛烈に心に響いてきました。そして何の関係もない子供たちまでもが苦しみを受けついたり、奇形児が生まれたり白血病になり、とてもやりきれない思いになりました。私の想像以上のできごとでした。この講演をきっかけに、原爆や、チェルノブイリの事故のことをもっと知ってみたいという気になりました。

そして今は、日本でも原子力発電所の役割が大きくなっていて、いつチェルノブイリのような事故がおこるか分からない状況だということ、核に間違つた安全意識を抱いていることなど、これからの私たちの課題にも目を向けて、知っていくことが大切だと思っていました。

## 前

半のアレクシエービッチさんのお話は、難しい内容だったけれどどこころに残るものでした。アレクシエービッチさんの熱い思いが伝わってきました。

後半、神田香織さんの講談は一瞬でも目が離せないほどの迫力に圧倒されました。あのまなざし、口調にパワーを感じ、講談の世界に引き込まれまして、照明や音響もとても工夫されていて、本当によかったです。心に残る一夜になりました。ありがとうございました。

小澤 あゆみ (16歳)

## 人

間が起こしたあやまちの事故処理で車にのせられて行く人間も気の毒ですが、かっていた動物を捨てにゆく、それを又軍人が動物を殺害する、人間のこうまんさを思う。原子力のこわさを知った。

## ち

エルノブイリは終わったと思いましたが、現在のベラルーシの状況は、独裁体制ということで事実がまだまだ明らかにされていないということがよくわかりました。情報公開や今起きていることが知らされることは大切なことだと思います。

神田さんの講談の最後が日本の地震での原発事故で終わるとは思いませんでした。そうならないようななんとかできることをしていけたらと思います。

ありがとうございます。

田中 貞見 (48歳)

## ア

レクシエービッチさんの戦争で使う核も平和目的で使っている原発も同じ核であるという発言にはっとさせられました。チェルノブイリの事故は他国の問題ではないと、地震対策に原発の安全性も含まれているのか、心配になりました。技術が進歩しても自然の力は足元にもおよばない

底力があります。浜岡原発が世界で唯一極めて危険という発言に、目の前が真暗になりました。

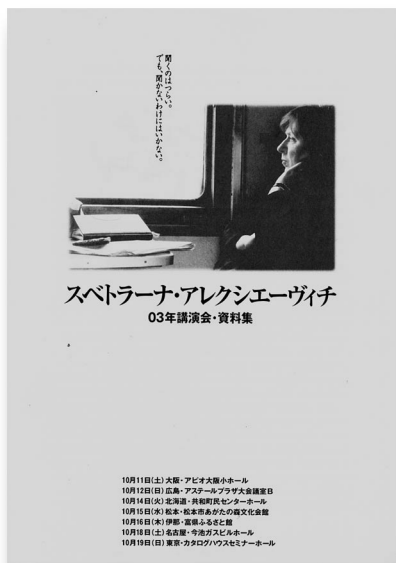
絶対安全の名のもとに、多くの原発が作られ、電気を供給、国民は無条件に使いやすさが文明、文化とばかりに無駄遣いをしてきた。ねむらない町が出現、昼夜の区別ない生活を一部の若者は送っている。一昔、NHKが深夜一日のくぎりを作ってくれた、民放も夜と朝のくぎりがあった。

今は24時間、いつでもテレビが鳴っているが、これも環境に一因すると思う。今は原発が供給量一位となっているが、水・火は自然破壊と見直されているが原発のこわさはごく一部の人の意識にあるのみ。原発中止を提唱すると同時に私達もわずかでしょうが節電し、自然法則に逆らわない生活スタイルに戻るときではないか、電気を流水のごとく使うことなく、限りあるもの、必



笠原 寿子

要な所には充分使うという意識に変わっていかないと原発のこわさはおわらない。「チリもつれば」のたとえのごとく、一人一人の努力も大切では。今回高校生が大勢かかわっている姿に、日本の未来に希望が少しもてました。きっと、原発が全国的に見直されることを「絶対安全」という言葉はないことをキモにめいじて。



**「スベトラーナ・アレクシェーヴィチ  
03年講演会・資料集」**

日本国内7カ所で行われたアレクシェービッチさん講演会の共通資料集。(A4判、32頁)

JCF事務局に在庫があります。ご希望の方には実費(送料分)でお届けしますので、事務局までお問い合わせ下さい。

10月11日(土) 大塚・アピオ大塚小ホール  
10月12日(日) 広島・アステールプラザ大ホール  
10月14日(火) 北海道・有明国際センターホール  
10月15日(水) 松本・松本市あがたの森文化会館  
10月16日(木) 伊勢・東海大学文化ホール  
10月18日(土) 名古屋・今池アピオホール  
10月19日(日) 東京・カトリック大塚小ホール

**スベトラーナ・アレクシェービッチさんの著書**

**「アフガン帰還兵の証言」**

(三浦みどり訳、日本経済新聞社) 1748円+税

ロシア軍兵士が体験した絶望の戦場。遺族も生還者も悪夢以上の後遺症をいまも病む。はじめて明かされた赤裸々な証言は、進行中の事態への予言ともいえる。(澤地久枝)

**「ボタン穴から見た戦争」**

(三浦みどり訳、群像社) 2000円+税

オーバーのボタン穴から見た爆弾の記憶。ドイツ軍の侵略を真っ先に受けた第二次大戦の惨劇の地白ロシア(ベラルーシ)で子供時代をおくった101人の証言。NHKスペシャル「ロシア・小さき人々の記録」で紹介された著者のドキュメンタリー。

**「チェルノブイリの祈り」**

(松本妙子訳、岩波書店) 2000円+税

1986年の大惨事から十数年間、人々が黙していたことは何か。幾多の文献や映像が脱落していたチェルノブイリの事実とは何か。巨事故に遭遇した被災者達の衝撃、悲しみ、思索の過程を鮮やかに描き出した珠玉のインタビュー集。人間のまなざしがとらえた戦慄、人間の内面にあふれる悲哀、チェルノブイリの記憶。



**神田香織さんホームページ**

<http://www.ppn.co.jp/kannda/>



**「神田香織張り扇日記」より**

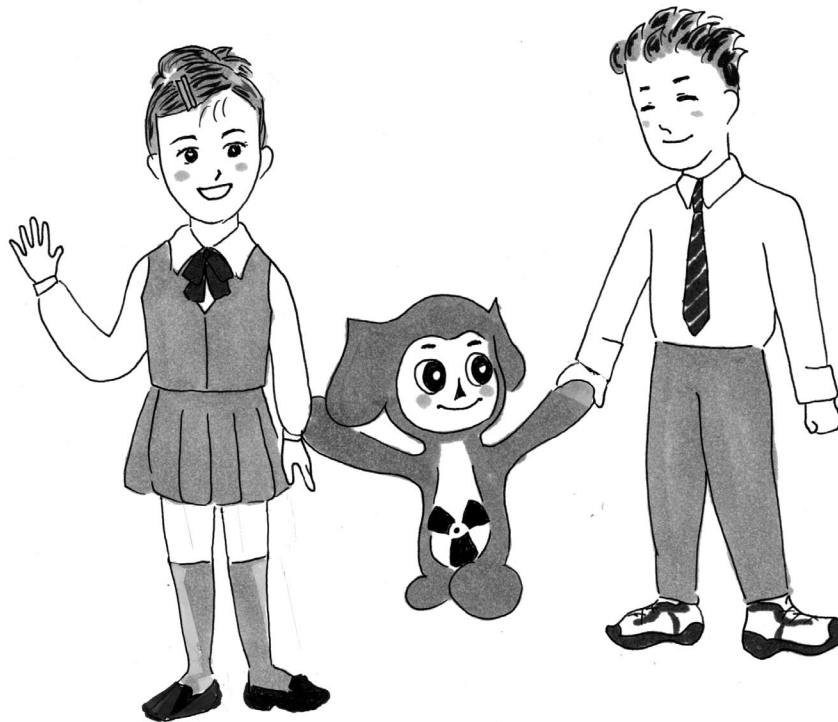
「チェルノブイリの祈り」の原作者スベトラーナ・アレクシェービッチさんが来日中できょうは松本で講演。私も講談で参加、アレクシェービッチさんに講談を聞いてもらえるのだ。「あがたの森文化会館講堂」は旧制松本高校の講堂そのままでは昔のままのシャンデリアも吊されてありおごそかな雰囲気。外は公園になっていて色づき始めた木々のそばで園児達

が走り回っている。チェルノブイリ支援活動に加わっている地元の高校生達が書籍の販売、司会、会場の準備など大勢で協力してくれた。控室でアレクシェービッチさんに挨拶する。瞬間、暖かい人柄が伝わってくる。「オ～、キモノ～」と私の衣装ににこにこ。日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)の理事長、鎌田實氏とのトークを客席で聞かせてもらった。前日、北海道泊原発を見た彼女は「海の側できれいだった」とし「原発をたてる場所は美しい。教会を建てるようなところを選んでる」と印象的な表現で引きつける。福島もそう、ためいきが出るほどきれいな海岸線に建っているのだ。独裁政権のベラルーシでは彼女のこの本は「有害な本」として出版されないと言う。政府が「国民を救えない」とどうするか。“ごまかし”をする。汚染地域に住んでいる人のところに大統領が行き、「もう、大丈夫」と農村にトラクターを送っているそうだ。「放射能に汚染されている森やリンゴは見た目は変わらないが別世界。自然が牙をむきだしている」そのリンゴを食べることは汚染されることに他ならない。通訳の竹内さんはボキャブラリーの豊かな方で、適切に即座に通訳してくれた。アレクシェービッチさんの独特の表現は、詩的であり、哲学があり、情感を感じさせる。「チェルノブイリ」から・・・「9・11」から・・・「戦争」から・・・、人類の未来をとらえようとするその視点は愛情に満ちている。だから私は語りたいたいのだ！講談終了後、アレクシェービッチさんも舞台上がり「自分が本で伝えたいことを、講談で語ってくれた」と激励してくださった。原作者と満杯のお客さんの前で語らせてもらったこの日は、生涯忘れることはない。(神田さんのホームページより)

## 第 72 次訪問団報告（速報）

高校生、文化祭での取り組み

### 私たちとチェルノブイリ



11月25日～12月2日の日程で、JCF第72次訪問団がベラルーシを訪問しました。信州大学の倉科憲治先生が、大学間の学術協定の事前準備のために渡航されました。理事の倉科先生は、ミンスクの小児血液がんセンター、ゴメリ州立病院を訪れ、今後の動向について情報収集したり、支援薬品を届けました。

1. ベラルーシの小児血液疾患の移植治療がミンスク・小児血液がんセンターのみ一極集中で行われる。

センターのユーリー先生からの情報によると、もとより、センターは移植治療の専門センターとして設立された。これまでも、130以上の治療例がある。骨髄移植、さい帯血移植も行ってきた。ベラルーシの移植治療は、センターに一元化する方向で進んでいる。

2. ゴメリ州立病院小児血液病棟移植部は、新しい放射線医学人間環境センターに引越す。しかし、移植治療は行われず、ミハイル先生、イーゴリ先生は、センター長の選定によって、就職できるかどうかわからない。11月に予定されていた引越しも、1月に順延し、まだまだ未定である。

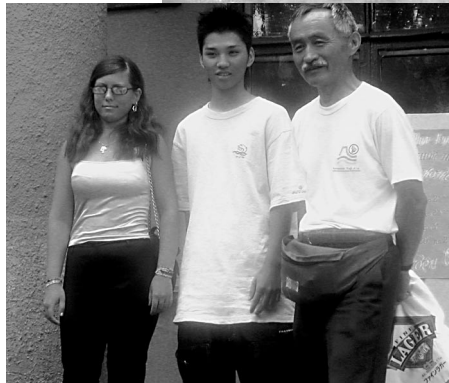
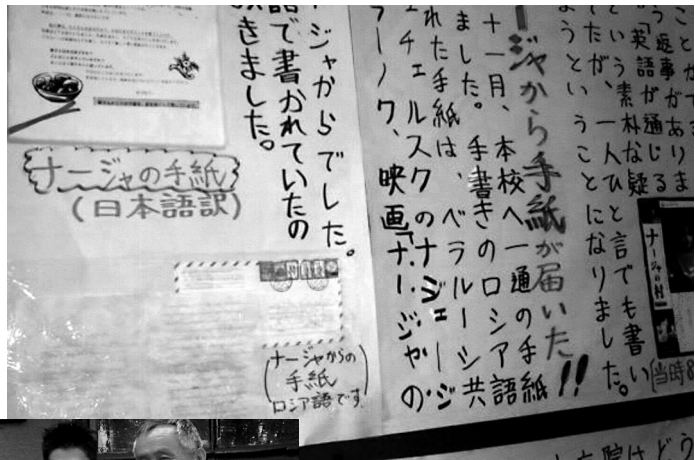
以上より、子ども達の血液移植治療は、ミンスクのみとなる。汚染の最もひどいのがゴメリである。ゴメリで子ども達の治療設備を充実させることが大切と、タチャーナ・シュミヒナ先生をはじめ、現地のお医者さん達と協働してきた。診断を受けても、治療のために300キロ離れたミンスクまで行くことは、たいへんなことである。病気の子どもの移送や付き添いのフォローは大丈夫だろうか心配になる。91年から続いている小児白血病支援もこれによって形態が変わる可能性が大きい。

昨年来、ずっと懸案だったが、もうしばらくベラルーシの様子を見ていくことになるろう。

クリスマスが近づきました。

ベラルーシから可愛い天使が皆さんのもとに飛んでくる事を願って！





泉ツアーに参加し、ナージャと会った古屋君と寺島先生

## ナージャからの手紙が出發 — 私たちの文化祭 —

武蔵工業大学第二高等学校

矢島 琢也 (図書委員長)

私たち武蔵工大二高の図書委員会は、今年度の秋の文化祭でJCF(日本チエルノブイリ連帯基金)の協力の下、文化祭の企画としてチエルノブイリ原発事故に関する展示・発表を行いました！

この発表をやるうと思っただけは、2002年の秋、あのナージャから手紙が届いたことがそもそものきっかけ

かけです。私たちの高校は3年程前にナージャ宛てに手紙を出していたのですがその返事が去年来たのです。そこで私たちは英語の授業時間を使ってチエルノブイリについて勉強しました。私たちが生まれてまもなく起こった原発事故なのにほとんどの人が知りませんでした。しかし、何か感じたものはあります。

ぶっちゃけ言うところの頃はこんなには関係ないし、などと思つていました。しかし、勉強を進めていくうちに原発が怖くなってきました。なぜなら東海村のことを思い出したからです。あの事故はそれほど大きくないにしろ事故は事故です。あれと似たようなものが日本で起きたらどうなつてしまふだろうって…。

さらに拍車をかけたのが東京電力の原発でのひび割れ隠しです。あれが発覚したことによって日本の原子炉の3

分の2近くが止まりました。何十基とあるうちの3分の2です。これだけの原子炉が…と思うと、いても立つてもいられません。チエルノブイリと照らし合わせて『対岸の火事』の気持ちじゃいけないなと思ひ、自分たちも再認識するとともに、一人でも多くの人に原発の怖さ危険性を知ってもらいこれから原子力発電自体をどうすべきか考えてもらえればいいと思ひました。

準備については、今年の夏にスタディツアーに参加した古屋君に手伝ってもらい、JCFにも出向いてお話を聞きしたりパネルを何点かお借りしてきました。私(委員長)が他との兼ね合いもあり、進行具合は遅々としたものでした。大丈夫かなあ…と思つていました。委員たちの目覚ましい働きにより遅れを一気に取り返すことが出来たように思います。古屋君にも写真提供をお願いして文化祭当日何とか展

示にこぎつきました。

展示中はどれほどの人に来てもらったか分かりません。しかし、感想文も寄せられていましたので、何人かの人を覚えてくれたと思います。その結果私たちの展示が文化祭大賞という、大変名誉のある賞をもらうことも出来ました。大変嬉しかったです。

私はこのチエルノブイリ原発事故のことを勉強することで何事もつながっているんだ…ということに改めて実感しました。もし、ナージャから手紙がこなかったら…もし、ナージャに手紙を出さなかったら…チエルノブイリについてこれほどまで深く知ることはなかったでしょう。逆に、手紙を出して返事が返ってきたからこそ私たちはチエルノブイリ原発事故についてこれだけ知ることが出来たし、これからはついで色々考えることも出来ました。

ここからは私的意見なのですが、私たちは原子力と言うものを早く掘り当てすぎたのではないのでしょうか？赤ん坊に刃物を与えるのと同じことではないでしょうか？やはり私たち人間の技術がそこまで追いつき、馬の手綱を取るように完全に操れるようになるまでそつとしておくべきではないでしょうか？？私はそう思います。



バザーの売上金をJCFに寄付

武蔵工業大学附属第二高校で英語を教える寺島先生は、授業で「ナージャの村」の英文を読んだり、ナージャとの手紙をつないだり、チエルノブイリを精力的に生徒たちに伝えていく。

今年のスタディツアーに参加された後も研究会などで、発表されている。そのエネルギーの一端を語っていた。

何もしたくない生徒たちに、失敗を恐れず行動をするトライ精神を養成し、生徒たちを、「井の中の蛙」にしないと思っています。外国から日本を見たり、外国PCウインドウを開いてやる事が大切です。松本美須々ヶ丘高校では、中国に夢を売る男を自称し、山岳部生徒達60名を四年間かけて中国の山へ引率しました。二高では、ニューヨークのホームステイにクラスから9名を、英語の授業で頑張り大学合格者の褒美にと、北京市内の世界遺産

にする心の涵養になれば、と思います。私の自動車は走行19万キロ、自転車は22年間使用中です。7階建てのゴメリ州立病院には一般者の為のエレベーターは無し、ゴメリ市内のデパートでは、月曜日にエスカレーターは停止する。チエルノブイリ原発の足元は暗い事等も伝えたい。日本は電力は十分足りている。こんど現地を實際に訪れて、現場を見て、教育に携わる立場上、《今後、自然破壊・公害など環境問題を、自分自身の問題としてばかりでなく、21世紀を担う生徒たちに訴えていかなくてはならない》との思いを強くしました。ベラルーシの友と文通を続ける事により、英語に前向きになり、英語を通して世界に目を向けさせる体験を造る様に努力したい、と思っています。辛い英語のテキストの中には、各種の問題を提起している課題が幾つかあるので、それらを利用しながら語り続けたい。岡本君（2000年参加）、古

屋君（2003年参加）に続いて、来年もスタディツアーに、何人かの生徒を連れて行きたいと思う。それも私が種を蒔くという事だと思っています。

過日、春になったら食べようと、日本ホウレンソウの種を蒔いて、何気なく袋の裏を見たら、何と！生産地デマークと書いてあった。半減期を考えると…。

映画『ナージャの村』の一場面、雪に埋まった大地の前でチャイコバールはつぶやく。

『暖かくなったら、仕事に取り掛かろう。種を蒔こう。たまねぎ、ライ麦、きゅうり、ジャガイモ。もう冬はうんざりだよ。暖かくなるまで待つだけだよ。』…希望を捨てずに呟く、この言葉が私は好きです。

寺島 勇輔



泉ツアーの仲間と寺島先生（左端）



## エネルギー問題にも目を向けて



### 山梨英和高校インターアクト



『子供の一粒の涙は全人類の悲しみよりも重い』—これはチェルノブイリ連帯基金へ訪問した際、神谷さだ子さんから教えていただいた言葉だった。この言葉はずっしりと私の胸に響き、自分には何が出来るのだろうかという模索し始めたのもこの頃からだ。私は今平和な日本に暮らしている。

飢える心配も、空から爆弾が降ってくる心配もない。あえて言うならば平和すぎて心配というところかもしれない。イラク戦争が起きたとき、『戦争はいけない』そう思いながらも私はいつもと変わらずに過ごしていた。遠くで爆弾が降っていても、私の生活に一切の支障はなかった。普段通りに学校へ行き、授業を受け、家に帰った。少し話がずれてしまったが、このことはイラク戦争のみならず、チェルノブイリに対しても同じだと思った。いくら遠くで苦しんでいる人がいても、私の生活は何一つ変わらず普段のままなの

だ。こんな自分と今の状況に、無性に腹が立ったのを覚えている。結局私も何も出来ないのかと失望させられた。

しかし、あのときの神谷さんの講演は、そんな私の胸にずっしりと響いた。私は自分の考えは少し間違っていたと思った。私は何も出来ないと思っていたけれど、実際は何もしようとしていなかったただただということに気付いたのだ。確かに、私が被曝被害で苦しむ子供たちの気持ちを理解しようとしても、しきれないものがあるだろう。

私には想像することしか出来ないのかもしれない。そして、私たちが子供たちのために出来ることなど本当に少ししかないのかもしれない。しかし、考えることをやめてはいけないのだと今は強く思っている。それに加えて、この事実をなるべく多くの人に伝えていこうと思う。今回の学園祭はその第一歩であったと思っている。チェルノブイリ原発事故は17年前の出来事だ。し

かし、被曝者の苦しみはあれから始まり、未だに終わっていない。チェルノブイリはまだ終わっていないということとを、これからも多くの人に伝えていきたい。

私たちは今高校生である。勉強や部活、塾などいろんなことに追われて毎日を過ごしている。そんな中でも大きな目を見開いて、大切な事実を見逃さないようにしたい。

(二年 呉 有珍)

私がチェルノブイリ原発事故のことを知ったのは今年インターアクトで松本のチェルノブイリ連帯基金に行く前に自分で学習したときが初めてだった。名前は聞いたことがあったが、それがどの様な事故で、どのような被害を与えたのかというのは全くと言っていいほど知らなかった。だから、調べれば調べるほどおそろしくなっていた。私はこの思いを一人でも多くの

人に伝えたくて、学園祭の準備に励んだ。インターアクトが使えるのは一教室分であったが、みんなの力でその教室いっぱい私たちが学んできた事を展示することができた。

私たちが今まで学習してきた事はほんの一部に過ぎないだろうが、その中でも私は本当に多くの事を学びとることができた。私が一番強く感じたのは、まず正しい知識をもつということだ。特に浜岡原発をはじめとする多くの原発をもつ私たちは正しい知識をまずもち、さまざまな課題を考えていく必要があると思った。

(会田 真紀)

私には全くの無関係だと思っていた。チェルノブイリという言葉が今年の学園祭で最も多く口に出したと思う。と同時に、とてもそれについて考えさせられたと思う。広島・長崎に落とされた原子爆弾については、前から聞かされていなければならない。チェルノブイリの原発事故が、その約千倍ということなど一度も聞いたことがなかった。そして、それを知った時、本当に信じられなくて大きなショックを受けた。メーデーに近い為に国民の多くが屋外へ出ていたにもかかわらず、秘密を通し続けた政府を私は許せない。すぐに発表していたら、どれだけの人間が助かったのかと考えると胸が痛い。原子力発電なんてなくなればいいと思った。でも、今の時代には欠かせない存在である。だからこそ一人一人がこの原発事故についてよく知り、原子力発電と共に暮らしていく為に、節電を心がけるべきではないだろうか。これらを学んだこ

とは、決して後悔していないし、無駄にしたくはないと思う。何かしらの形で社会に貢献できたらと思った。

(二年 網野 文絵)

7月にチェルノブイリ連帯基金の本部へ行ったのがきっかけで、原子力発電所に恐怖を感じるようになり、いろんな本を読んで調べるようになり、放射能のこと、被曝して苦しんでいる人たちのこと、汚染してしまっただけのこと、など知らなかったことばかりでした。

今の日本が核エネルギーに依存していることも、地震国でありながら原子力発電所が多いことも、また新設されつつあることも知りました。私は調べているうちに原発があることが恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなりまして。今でも、原発をなくして！と叫びたいくらいです。しかし、原発をなくせないのは私、私たちがこうして毎日

たくさん電気を必要としているからで、とても原発を強く主張できる立場じゃないと感じています。

学園祭ではインターアクトのみんなが今まで調べてきたことを展示して、多くの人に見てもらえて良かったと思います。私は学園祭を通してはつきりとチェルノブイリ事故が私たちに教えてくれていることがわかりました。チェルノブイリに限らず私が読んだ本でもみんな口をそろえて言っていたことです。それは：科学技術は完全なものではなく、いつかは必ず故障してしまうという事を私たちは認識すべきだ：という事です。日本がどんなに高度な技術を持っていたとしても、一度原発が壊れてしまったらどうなるのだろうかと思います。

学園祭の時の展示で、誰かがチェルノブイリは「二ガヨモギ」という意味で、これは聖書のヨハネの黙示録にも同じ言葉がある：と書いたのを読みま

#### ◆ 見て下さった方の感想 ◆

した。黙示録は聖書の最後にあつて、世の終わりを黙示しています。事故が起きた時、世界中の人が「二ガヨモギ」に驚いたと聞いたことがあります。私もこの事を考えると胸騒ぎを覚えずにはいられません。

原発についてはみんな一人一人違う考えを持っていると思います。私もっといろんな立場の人の意見を聞いてみたいです。

(田井 富士子)

チェルノブイリの原発事故を初めて知りました。最初は時間つぶしで来ていただけだったのに、ビデオを見たら真剣に考えることが出来ました。インターアクトすごいですね!!

(二年 A・S)

長野の人というとても身近な人が被曝者のために一生懸命働いている姿にとても感動しました。日本以外にも原発事故が起こっていてとてもおどろき、その人たちのために自分も何か出来るの良いです。

(二年 S・H)

チェルノブイリについて少しは知っていたけど、たくさん調べてあったので、もっとたくさん知ることができました!!みんな、すごいがんばったね!! お疲れ様!!

(二年 Y)

プロジェクトX見ました。手術するのは、とてもこわいです。医者と患者の信頼関係を作るのは、とてもむずかしいと思った。患者の事を考えるのは、とても大切な事だと思ふ。

(二年 M)

沢山の資料をすべて手がきで書いていて、みんなの苦労がうかがえました。おつかれサマ!!チェルノブイリ事故の要因が1〜18までもあって驚きました。でもやはり一番の原因は政府の秘密主義と軍事ゆうせんの姿勢だと思います。プロジェクトXの日本医師の働きは同じ日本人として誇りに思つたし、他の国のもんだいではなく、私にも何か出来るのでは、(しなくては)と考えさせられました。とてもイイ展示でした♡

(二年)

写真を見て、とてもかわいそうだな  
思った。今、私たちはとても幸せな暮  
らしをすぎている、貧しい人々の暮  
らしの気持ちなどちゃんと分かってい  
ないので、これからは、ちゃんと考え  
ていこうと思います。

1986年、私たちが生まれた年に起  
きたチエルノブイリ原発事故。人間の  
力によって作られたもので自分たち自  
身を破滅の道に追いこんでいくのは、  
なんか変ですよね。

(二年 東保・白木)

NHKのVTRがよかった。詳しく調  
べられていることにも感動しました。  
記憶は風化させてはなりません。

(林)

写真を見てかわいそうだと思います  
た。病気の子どもたちが、苦しそうで  
すごくかわいそうだと思います。

私たちと同じ子どもなのに、暮らし方  
が全然違って、可哀想だとおもった。  
これを見てまた日本はいい国だなーと  
思った。なんで同じ子どもなのにきよ  
くたんのかふしぎだ。

ちがう国の人たちがかわいそうだっ  
た。

日本は、本当に平和だと思いました。

日本に生まれてよかったなー…と思  
いました。

日本は平和なのだと思いました。

よく調べられていると思いました。こ  
れからもがんばって下さい。色々調べ  
てあり、良いと思う。私も昔はこうい  
うのを調べたかな。

## 長野県立小海高校文化祭 バザーにチャレンジ!



小海高等学校の文化祭では、1年  
生がバザーを開き、その収益金をJCF  
に寄附してくださいました。バザー  
は、協力を求めるチラシの配布からバ  
ザー用品の回収まで、暑い中歩き回る  
など、色々な苦労があったようです。  
集まったバザー用品は、部室一杯にな  
るくらいの量だったようです。  
1年2組・長田卓也さんの報告文の  
一部を掲載させていただきます。

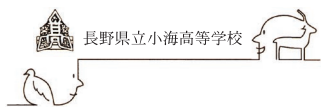
販売に至るまでの準備はとても大変  
でした。夜遅くまで残り、陳列をしま  
した。バザー会場に入りきらなくらい

小学生の娘には展示が少しむずかし  
かったようですが、分かりやすく説明  
してもらい理解できたようです。

待機電力に気をつけよう。

子供たちがかわいそうだと思います  
た。とてもくわしくてよかったです。

よく調べてあり、説明も分かりやす  
かったので良かった。かなり準備に時  
間がかかったと思うけどよく頑張りま  
したネ!!



いの量を用意していましたが、開店と  
同時にあつという間に品物が売れ、レ  
ジの前は長い列になりました。レジの  
係を交代したり、お客さんに呼びかけ  
たり、全品完売を目指し、学校全体で  
バザーを盛り上げました。見事全品完  
売…とはいきませんでした。予想以  
上の売上があり、ほっとしました。寄  
附したお金が少しでも役に立てばいい  
と思います。



### 第五福竜丸乗組員 大石又七さんにお会いして

谷田部裕子  
(ナージャの輪)



大石又七さん  
「ピキニ事件の真実」(みすず書房)より

発不祥事等、数々の苦悩がありました。チエルノブイリの子供達の「私達を忘れないで、繰り返し返さないで」の叫びと、現実の中の自分達の非力との間の無念を、何度思い知らされてきたかしれません。四年前の今頃『ナージャの村』上映会に奔走していた私達ナージャの輪の仲間も、親の介護や仕事や日常生活の多忙の中でなかなか集えない日々が続いています。そんな中で先日、臨界事故被害者の会を訪問された大石又七さんとそのご家族、支援者であるマグロ塚を作る会(ピキニ実験を世に伝え平和への道しるべとする会)の皆様とお会いしました。

1999年9月30日のJCO臨界事故から四年余が過ぎました。今も毎日あの扉の脇を通って暮らしています。臨界反応を止める術なく屋内退避となり、じっと息をひそめていたあの日のゴーストタウンのような街は、これまたそれが嘘のように一見平穏です。逃げるべきか外に出ないべきかわからず、子供達に何を食べさせていいかわからない、あの日の不安と混乱と悔

恨は、時を経て落ち着いては来ました。しかし、地震があればすぐ原発は大丈夫かと思えば、上空を何かの事由でへりが飛べば「すわ何事か」と近隣が青い顔して外に飛び出し、身近に病を得る人あれば気がかりに思い、目に見えず匂いもしない透明汚染は、不安というものになつて消えてはいません。この四年間、新しい核施設の誘致問題や臨界事故健康被害裁判の起訴、全国の前

その道を尽くして死するは正命なり——自分だけのためにやるんじゃない。みんなのためにやるのだ……仲間を犬死にさせたくない——  
大石さんは乗船中に20才を迎え被曝

し、久保山愛吉さんと同じ病室に看取り、その後差別を逃れるため上京、長い間沈黙の闘病生活を続けながら、「忘れない、いや伝えなければ」の煩悶の中からやがて、「大石さんの話を聞きたい、自分たちも何かしたい」という中学生達の瞳の力を前に重い口を開いていったそうです。程度の差は天と地ほどあれ、私にもよくわかる気がいたします。初対面の日、物静かに座る大石さんに私は当地の状況を告げて、「何が辛いと言つて一番辛いのは、内心不安を抱えつつも皆が一つになれず、差別や経済的生活基盤を考えて、臨界事故を忘れようとしていることです」と申し上げました。大石さんの、「まったく同じことです」とおっしゃった一言が、今重く響きます。私達にとつてのまさかの臨界事故は、大石さん達にとつてはやっばりに過ぎなかつた……

お考えでしょうか。違うのです。国連やWHOや国際司法裁判所の世界の公の場で、核兵器使用の違法性を明言することなく、核の傘を享受している国として在るのです。大石さんは記しています。「あれよあれよと言う間に平和憲法はなし崩しにされていく。明日が怖い。国は、原水爆で三度日本人を殺した国のお先棒を担ぐようなことだけは絶対にしてほしくない。……ピキニ事件は決して忘れてはいけません。」

(注) 1954年3月1日、ピキニの米水爆実験で、日本のマグロ船856隻二万人の乗組員が被曝するが、後遺症等への調査補償はほとんど無し。

皆さん、日本は世界において、唯一の被爆国として核廃絶を訴えていると

グランドゼロをお読みになっている皆様にお願致します。五十年前から終わることなく続き拡大されている犯



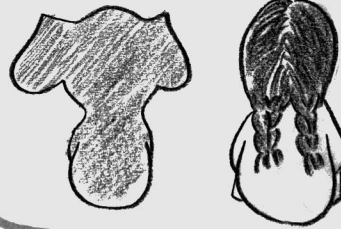
ぼくは  
ライラちゃんに  
へんじが  
できなかった。  
ぐんぷくを  
きて  
イラクに  
くる人は  
みんな



「レッカウランタン」を  
いはいおとした  
アメリカ人のなかまに  
めえるんだ。  
「ジエイタイの  
フッコウジエン  
カツドウ」なんて  
ライラちゃんたちに  
つうじるわけが  
ない。

この前 ライラちゃんに

会った時のこと



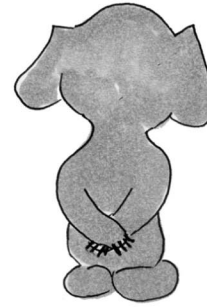
おとうさんは  
「日本の人も  
とうとう アメリカの  
なかまになった」って  
おこっていたけど  
ほんとう？



おとうさんが  
アメリカの人が  
いはいおとした  
「レッカウランタン」  
のせいだ、って  
おおきなこえで  
いった。



ライラちゃん  
どうしたの？



おともだちの  
ダアーちゃんが  
しんじまったの...



ハックツビョウ、  
っていう  
びょうきで  
しんじまったんだって。





写真提供 本橋成一

私はこの発言にもマスターと同じ歴史へのまなざしを感じます。松本での夜、神田香織によって日本の文化伝承である講談に翻訳された自らの『チエルノブイリの祈り』に触れて、女史は「消防士の妻と同じ息遣いを受け取った」と賞しました。その時彼女が使った *вечное дыхание* というロシア語は「永遠の呼吸」という意味です。ある晚いかなる準備もなく運命から「不意打ちを食らった」リュドミラ・イグナチエンコの息遣いは、個人の経験であることを超えた普遍的経験の発する呻きとなりました…。

世界の闇が一層深まったこの秋、押田成人神父が天に召されました。八ヶ岳の麓で、太古からの湧水を守って無一物の農耕生活を営みながら、現代文明が孕む幻想を告発してこられました。その庵には、今日も同じ風が吹いています。「現代文明には精神がありません。精神を回復するには、科学に抵抗しなければなりません。否定するのではなく、抵抗するのです。」

「深みからのいき(息)に運ばれる現実があるとき、それが、意識にひびきを与える、祈りの言葉になるでしょう。深みからのいきに運ばれる現実がなければ、本当の祈りはないのです。」



写真提供 本橋成一

「人々は、もはやチエルノブイリは忘れ去られている、と言います。けれども実際には、それは未だに理解され始めてすらいらないのです。」

十月十五日、松本で開かれた講演会でアレクシエービッチ女史の口から漏らされた言葉です。この一言が、私に与えられた大きな宿題となりました。

「もはや忘れ去られている」とすればチエルノブイリは過去に属するものであり、「未だに理解され始めてすらいらない」とすればチエルノブイリは未来に属するものでしょう。けれども、彼女が本当に伝えようとしているのは、私たちの生存に直接かかわる「現在」としてのチエルノブイリではないでしょうか。

普段、私たちは無造作に「過去」・「現在」・「未来」をばらばらに分断された断片のように捉えています。私自身の生活をかえりみても、過去への責任と未来からの問いにさらされている現在として今日を生きている、とはとても言えません。『新しい歴史の教科書』を年表の切り貼り作業のように書き替えられるという錯覚が巧妙に正当化されようとしています。でも、果たして本当に、歴史とは私たちの生活とは無関係に過ぎ去るだけの他人事でしょうか？

学生時代、珈琲屋のマスターが忘れられないことを言いました。「リンゴ」といえば、人は赤い「リンゴの実」のことしか考えない。でも、つぼみも、若

ジーマの

# ロシア話

◆あるニューロシアンは、友達にこう言っている。

— 私は、特別の注文でロールス・ロイスを作ってもらった。車体は純金、ホイールはプラチナ、ハンドルはエメラルドばかり、制御盤はダイヤモンドで飾っていて、車内は全部ジャガー（アメリカひょう）でおおわれている。

— その車、乗っているの？

— いいえ、まったく乗らない。燃費が悪くて、不利だから。

◆あるニューロシアンはレンブラントの絵画を買った。

— その絵画が本物であるとの保障はあるか？

と聞くと、

— 当然だ。保障期間は3年間だよ。

◆看護婦は医者に、

— ドクター、私たちは患者のペトロフを失った。

— どうしたの、死んだ？

— いいえ、治ったんです。

◆お金で買えるものと買えないものは何かというと、

- ベッドは買えるが、睡眠は買えない。
- 食事は買えるが、食事をする楽しみは買えない。
- 本は買えるが、知恵は買えない。
- 遊びは買えるが、幸せは買えない。
- セックスは買えるが、愛は買えない。
- 薬は買えるが、健康は買えない。
- コネは買えるが、友達には買えない。
- イコンは買えるが、信仰は買えない。
- 墓地における場所は買えるが、天における場所は買えない。

◆ある男性は花屋さんに入ると、

- お姉さん、私の家内の為に、100本のバラを選んでくれ。
- 女の店員は大変に恐そうに、
- あなたは（妻に）どんなひどいことをしたのか？

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート——



## АНЕКДОТ



◆Новый русский рассказывает приятелю:

- Сделали мне по спецзаказу "роллс-ройс"! Кузов золотой, колеса из платины, руль весь в изумрудах, приборная доска в бриллиантах, салон ягуаровыми шкурами выстлан.

- Ездишь на нем?

- Невыгодно. Бензина жрет много!

◆Новый кузский купил картину Рембрандта и спрашивает:

- А гарантия есть, что картина не поддельная?

- Да, 3 года.

◆Медсестра:

- Доктор, мы потеряли больного Петрова!

- Он что, умер?

- Нет, выздоровел!

◆За деньги можно купить.

Кровать, но не сон.

Еду, но не наслаждение ею.

Книгу, но не ум.

Развлечение, но не счастье.

Секс, но не любовь.

Лекарство, но не здоровье.

Связи, но не друзей.

Икону, но не веру.

Место на кладбище, но не на небе.

◆Мужчина входит в цветочный магазин и просит:

- Подберите мне, пожалуйста, сто роз для моей жены.

Продавщица в ужасе:

- Господи! Что же вы такого натворили?

# 振替用紙のメッセージから



◎「アレクセイと泉」を観てきました。自分のことを欲深な人間とは思っていません。お役立て下さい。(京都府)

◎娘に赤ちゃんが生まれました。元気に泣いています。この喜びを少し何かのお役に立てていただきたい。そしていろいろな方々に感謝です。皆様のご活躍にも感謝！(千葉県)

◎カンパとして少額ですが送ります。(千葉県)

◎この7月に父を亡くしました、どんなのちも大切ですが、少しばかりの応援です。(石川県)

◎8月30日(土)茨城県牛久市エスカードホールで上映会を行いました。目標をはるかに上回る人が参加して下さい、収益を寄附できて皆で喜んでいません。当日のカンパと共に一般寄附として送金致します。(茨城県)

◎マリアちゃんが良くなりますように。広島原爆忌に出席したイラク人が劣化ウラン弾の被害を訴えていました。信じられない兵器が平気で使われているとは。(神奈川県)

◎グランドゼロ「まなざしのゆとり」

◎スタディーツアーありがとうございます。今は、こんな事で応援するしかないけれど…。応援しているという気持ちだけです。(東京都)

◎グランドゼロが届くたびに多少なりとも応援しなくてはと思うのですが…。わずかですがお役に立てて下さい。(茨城県)

◎パンヤの監督『守』は30歳になりました。目に見えるもの、見えないものに感謝いたします。(石川県)

◎わずかですがお役に立てばうれしいです。(京都府)

◎いつも少額で申し訳ありません。(大阪府)

◎元気に育って下さい。(長野県)

◎インターネットで綴られた反戦・非戦の言葉「千人祈」を読みました。(劣化ウラン弾を使うということは広島・長崎から何も学んでいないということになるのを日本の首相は知っているのだろうか?) (へいつたいたどの神様に祈ればいいのか?) 4月7日の記者会見で小泉首相「早く降伏すればいいのにな。そうすれば犠牲者が少なくてすむのに」。—こういう人に日本の方向を決めないで欲しいです。(長野県)

◎7月のスタディーツアーに参加させて頂いたとき、『埋葬の村』の明るい住人との交流を楽しみました。年金生活のささやかな支援。(東京都)

◎いつもお働きに感謝します。(北海道)

◎わずかですがお役に立てばうれしいです。(長野県)

◎骨髄移植をして3年め。元気に生かせてもらっています。ホント少なくて申し訳ないのですが…。(山梨県)

◎会報をお送りいただきありがとうございます。少額ですが、お役立ていただけました。幸いです。(新潟県)

◎医療支援活動ありがとうございます。(京都府)



# ベラルーシの食卓

## 雪色ガチョウスープ

低くたれ込めた雲、一面に雪に覆われた大地、常緑樹の森もぼんやりと暗く煙っている冬。農家の煙突からはペチカの煙が立ちのぼる。

秋には、越冬用の薪が軒先に積まれ、長い冬の暖が確保される。寒さがやってくる頃、一週間焚き続けて家全体を暖めるそう。一度暖まったら、後は火を絶やさないように調整しながら燃やし続ける。ペチカの火力は強く、乾いた薪だけでは、あつという間に燃え切ってしまうそう。森から切ってきたばかりの生の薪でも充分時間をかけながら燃えていく。夜は熾き火にして、翌日のために火種を絶やさない。

こうして、準備されたペチカで、今年は誰から食卓にあがっていくのだろうか。

どうも、おばあちゃんの言うことを聞かず、勝手にあちこち歩き回っていた順らしい。

夏の間、川べりで放し飼いにされたガチョウは12月には、町の孫達のために、そしてジェッド（おじいさん）とバーバ（おばあさん）の寒い一日のスープのために絞められる。

### <材料>

ガチョウ肉（鶏肉で代用） 500g・玉葱 1個・酸味のあるリンゴ 4-5個  
・米 3/4カップ・ペトルーシカ（香辛野菜）・パセリ・塩胡椒 少々

### <作り方>

1. ショウガとガチョウを煮込む。
2. 洗ったリンゴを切って入れる。
3. 米を別の鍋にスープで煮る。
4. ショウガとリンゴを取りだし、お米を入れる。
5. 火にかけて沸騰させる。生クリームを少しづつ注いで、良く混ぜ合わせる。
6. ガチョウのブロック肉を切って、スープに入れる。

ジャガイモ・人参など野菜を入れてもいいですね。



◎「アレクセイと泉」所沢上映会を通じてチエルノブイリの事故後の現実を知るきっかけになりました。（埼玉県）  
◎「グランドゼロ57号」たくさんの方の目に触れています。ありがとうございます。（埼玉県）  
◎先日お電話でお話した方の寄附です。よろしくお願ひします。（長野県）  
◎いつもグランドゼロを送って下さってありがとうございます。（石川県）  
◎10月11月と嬉しいことがあります。私の心を元気づけて下さる方々に感謝して。少しでも病気の子供さん方の役に立てていただけることも又、私の喜びです。（千葉県）  
◎年金生活者ですので、もつと支援したいけれどこれ位で。グランドゼロを読めばあれにもこれにもと思いますが…。たくさんの方々、とくに若い方がこれからもガンバって下さい。（大阪府）

（大阪府）

◎わずかですがお役立て下さい。（東京都）  
◎マリアさんのお幸せを祈ります。わずかですがお役立て下さい。（京都府）  
◎事故から15年、なお800キューリーの数字に驚きました。チエルノブイリを通して、「地球のあり方をみつめていきたい」と私も思います。（大阪府）  
◎JCF活動を、グランドゼロ55号で知りました。もつと多くの周りの人に情報提供できるように会員になりたいと思います。（北海道）  
◎マリアちゃんのために、本当に気持ちばかりですが…。（長野県）  
◎気持ちばかりですが、少しでもお役にたてればと思っております。（長野県）



ファスレ-チャ: 出会い

ВСТРЕЧА



JCFスタディツアーが変えたもの

先日、看護師向けの雑誌のライターから、海外医療ボランティアに参加されたナースの方に体験談を聞きたいので、どなたかを紹介して欲しいという依頼を受けました。昨年のJCF医療者スタディツアーに参加して下さいました看護師の国井真波さんに紹介の承諾をとるためにメールしたのがきっかけで、国井さんの近況を知りました。

国井さんが看護師を目指し始めた頃から、変わらないものがふたつあるそうです。「熱帯医学の勉強」と、「FGM(女性性器切除)廃絶の活動をする」こと。現在、FGM廃絶活動をしているNGOに所属しているそうです。熱帯病による死者が多く、またFGMを受けている女性が多いアフリカのブルキナファソを支援しているNGOが日本にあり、医療支援もおこなっているのです、そのNGOに派遣看護師の登録をして、正式派遣の前に来春インターンとして現地で1か月活動する予定

されたのです。そこで早稲田を卒業後、あらためて看護学校に入り、看護師の資格をとりました」

国井さんはエジプト考古学にあこがれ早稲田大学に入学、念願かなってエジプトにも行きました。(幼い頃「ツタンカーメンの謎」といったエジプト本を読みふけり、吉村先生の本や、漫画「王家の紋章」にはまった布山の耳が思わずダンボになります)

「とにかく外にでたくて、いろんなところに旅行して、いろんな国に行くうちにエジプト考古学だけの枠にはまっていられなくなり、もっといろいろなところを見たい、知りたいと思うようになりました。そして国際協力という学問と仕事を知り、気付いたら考古学は趣味になっていました。学生時代にボランティアで『国境無き医師団』に関わるうちに、自然に医療支援に目がいき、その事務局の方から、海外でナースとして働きたかったら熱帯医学の勉強もした方がいいとアドバイス

もともと身体が丈夫な方では無かった国井さんは、小さい頃は空気が悪い場所や不潔なところに行くのと吐いてしまったり、しょっちゅう熱を出して学校を休みました。その国井さんを熱帯病、感染症が心配されるブルキナファソで働こうとまで思うように変えるのは、大学に入って友人と最初に行ったタイでの圧倒的な体験でした。初めての海外で、テレビでしか見たことがないものとの出会いの衝撃。ストリートチルドレンは日本のホームレスとは全く違いました、自分の目で見たことの大さき、それが汚いという感覚を吹き飛ばしてしまっただけです。

短期の緊急医療をしたかった国井さんは、ナースとして働くようになることを希望、オペ室に勤務、外科的治

だと言います。また国井さんはホームページ <http://home.atn.ne.jp/sea/dna/index.html> (my sick) というコーナーで、ご自分の卵巣腫瘍発見からオペの決心、入院、そして社会復帰までの具体的な経験をアップしていらっしゃいます。

メールでお話したり、国井さんのホームページを見せていただいているうちに、直接お会いしてもっとお話を聞きたくなりました。国井さんは、卵巣腫瘍のオペのための入院の前日に、時間を割いてお話しを聞かせて下さいました。

晴天続きだった連休とうって変わった週明けの激しい雨の中を、国井さんは横浜から有楽町まで駆けつけて下さいました。さっそく国井さんの歴史をお聞きしました。

療を身につけ、緊急医療援助活動として現地で役立てたいという夢を育てていました。ところが体調を崩して病院を辞め、外科緊急医療に関わる道が遠のいてしまいました。そんな時に国際協力関係のスタディツアーの紹介本で、JCFの医療者スタディツアーを知ります。



ポレーシェ学校で子どもたちの採血



「JCFスタディツアーに参加したことは大きな意味がありました。そこで今までは180度違う、地域に密着した医療、または病院に行くまでに予防医療により地域で病気を防ぐという、予防医療、保健医療に出会いました。現地への支援を長い目でずーっと見ていく、そういう気持ちにがらっと変わったきっかけが、ベラルーシでし

た。鎌田先生の生き方にも共感しましたし、そういう意味でのスタディツアーで得たものは大きいのです。」

国井さんは小学校6年の時に、チェルノブイリ事故の記事が新聞の一面に載ったのを、なぜか鮮明に覚えているそうです。

「ベラルーシには行きたいと思っていて、行く前からベラルーシの風景を想像してました。ロシアと違ってベラルーシの情報はあまり無いので、広河さんの写真集などを見ただけだったのですが、現地の風景が、行く前に自分の中にあつたイメージ通りだったのでびっくりしました。特に神谷さんに連れていってもらったオートル村は想像そのまんま、ゴメリでも曇って雨になりそうな風景が、ああ、この通りこの通り、とびっくりしました。…また行きたいなあ〜」



介護老人保健施設つくしの里で

国井さんが遠い目になります。

ベラルーシから帰国した後、支援団体の横のつながりを大切にするためにもNGOで働きたいと思い、ネパールの女性と子どものための支援を促すフェアトレードのNGOに就職します。しかしもともと看護師の仕事がいやでやめたわけではなく、卵巣に疾患が見つかって体調不良でやめたので、やっぱり現場に戻りたくて、そのNGOにはスタッフとしてではなく、ボランティアとして関わることにして、夜

勤なしの勤務を条件にして、派遣登録看護師として介護老人福祉施設に就職し直します。

「看護師の仕事にはやりがいがあり、実際にこの仕事を離れるとどうしても忘れられない患者さんがいます。亡くなってしまった患者さんが思い出に残り、もっとあんなふうにしてあげたかった、あんなふうに関わってあげたかったという思いが高まって現場に戻りたくなったのです。看護師の仕事は大変なことが多いですが、施設利用者さんの顔をみるとホッとしますね〜」

「FGM（女性性器切除）はイスラーム教の文化だと勘違いされるのですが全く違います。発祥ははっきりしません。（\*注\*アフリカ大陸を中心に約28カ国の地域でおこなわれ、国連の推定では毎年200万人の女性（少女）が、この手術の対象者となり、過



FGM廃絶を支援する女たちの会で ホームページ <http://www.jca.apc.org/waaf/>

去にFGMを受けた女性は累計で13億人になるといいます。切除時や出産時等に感染症や健康被害をもたらしている。最近ではアフリカ移民がFGMの伝統を持ってアメリカに入り、アメリカでも増えているそうです。この習慣のある地域のアフリカの女性の大半は、正

確な情報を得られないままに、それを独自の文化と思いきや、止めようと思わないのです。いけないことだと思えない、危険だと思える人もいない。日本人や欧米人がこれはいけない悪習だと言ったところで、私たちの伝統を破るなど言われてしまう。しかし明らかにひとの命を損なうことは文化ではないし、虐待であると思います。でも現地ではFGMを受けていないと売春婦だと言われるので、母親としては自分の娘をそんなふうに使われたくないために、FGMを受けさせるのです。しかも手術をするのは現地の助産婦で、その危険性は認識していて、できればやめたいと思っています。でもそれが彼らの重要な収入源であり、しかも一度FGMを施した少女は、その後も出産等の度に『顧客』になるので、簡単には止めることができないのです。この春からブルキナファソに短期研修として病院に入り、まずは現地の

## モスクワ便り



モスクワの秋は日本とちがいます。短い『黄金の秋』、その後灰色の空になり、雨、時として10月末には雪が降り出します。私達の秋は、冬の始まりです。今年はこのような天気から逃れ、紅海で少し暖まる可能性が出てきました。私はまずアラブの東部に出発しました。エジプトに行き、ピラミッドを見、アレクサン

ドリア市からナイル河を下りルクソールの古い寺院を訪れ、カイロの有名な博物館にずっと行きたかったのです。しかし、今回は時間がありません。全部で1週間です。1週間ですべてを見学することは不可能です。ピラミッドから休息する海まで飛行機で飛ばなければなりません。なので、私と友だちはこの1週間は何もしない、ただ泳いで日光浴をし、美味しいアラブ料理を食べて、たくさん眠ろうと決めました。

ところが『ラマダン』になりました。これはイスラム教の行事で40日間、日の出から日の入りまで、何も食べたり、飲んだりしてはいけません。太陽は夕方5時に沈み、朝6時に昇ります。特にひどく見えたのは（お気の毒）レストランの給仕さん達です。注文した人に食べ物や水を運んできます。しかし、自分達は何も食べることも、飲むこともできません。私は、この業務についているのが男性だけなのに驚きました。ホテルのレセプション、レストランのコックさん、給仕さん、ホテルの部屋のルーム係り、商店の販売員、銀行員—男性のみです。通りを歩いているのも男性だけです。エジプト滞在の3日目に私は通りで初めて女の人を見ました。女性は長い袖の長い着物を着ていました。頭にはスカーフ、ズボンでした。通りは35度の暑さだったのですよ！

とっても明るくて親しみやすい人々を大好きになりました。でもとてもめずらしいもの—それは紅海です。水はとても温かく28度、岸のすぐ近くから始まる珊瑚礁は有名です。だから、海にはとてもたくさんの魚がいます。大きいもの、とても小さなもの、さまざまな色合いの、明るいものもいます。岸のすぐ近くまで魚達のはねてきて、人間と一緒に泳いでいます。恐がりません。私はダイビングした時、まるで別の世界へ招待され、そこでは誰も私と争わない、誰も怒らない（なかよくする）、と感じました。

イリーナ・ニコラエバ（JCFモスクワ事務局員）

人の認識の度合いを知るところから始まります。いくら女性同士でもいきなりFGMのことは聞けないので、一回だけの滞在にはせずに、長い目で関わり、FGMを医療の観点から捉えて、廃絶に向けて支援していきたい。

日本でのナースの仕事も大切にしたい、技術水準の高い日本の最新看護や医療を勉強して、働いて得たお金を現地への渡航や滞在費に充て、息長く支援に関わっていくつもりです。」

静かに淡々と自分の選んだ道を語る国井さんのお話を聞いていると、エジプトの壁画にもあったという「今時の若い者は…」という言葉が死語になったような気さえしてきます。

さてそろそろ約束の時間が終わりに近づいた時、特別ゲストの登場です。明日が入院ということで、今日はその準備の買い物もあり、その荷物持ち要

員として招集された国井さんの彼！国井さんが早稲田に学んでいた頃から仲間で、今では東洋史を専攻、遺跡と現地の人々の暮らしをテーマにしているという鈴木章史さんは、長身の爽やかで柔らかな笑顔の方でした。

「国井さんのアフリカ行きは心配ではないですか？」

思わずのおせっかいおばさん発言に、「いつも突然遠くに行ってしまうので、はらはらし通しです。でもおかげで僕もいろんなことを教えてもらいました。ベラルーシの時もそうでしたよ」鈴木さんの優しい眼差しの先に、ちよつと首をすくめる国井さんがいました。お二人といっしょだと、激しい雨でも何だか明るい有楽町でした。

国井さんのお話を聞きに上京する前日、JCF宛にこんなメールが届きました。「私は高校3年生の将来はNGO職

員として働きたいと思って今悩んでいるものなんですけど、どのようにしたらそちらのような団体で職員として採用してもらえるのですか？やはり国際文化系の大学を卒業し大学院まで行かなければなりませんか？」

ゆとり教育の影響でしょうか、最近NGOに興味を持つてくれる中高生が増えてうれしいことなのですが、事務局スタッフのジミーで煩雑な日常業務をどんなふうの説明したらいいかと、戸惑うことも多いのです。

今回の国井さんのお話は、この高校生への一つの答えにもなったようです。

国井さん、手術お大事に。またブルキナファソでの経験を聞かせて下さい。そして彼と二人で、是非念願の信州の温泉に来て下さいね。事務局でポルシチ作って待っています！

## ニュースクリップ

### <国内>

#### ●国内プルトニウム 5.4 トン

文部科学省と経済産業省は、使用済み核燃料から取り出したプルトニウムの国内保管量は2002年末時点で5.4トンだったと原子力委員会に報告した。海外では、再処理を委託している英国、フランスに計約33.2トン保管されている。

(9月2日 共同通信)

#### ●イルカ、アザラシも核汚染

イルカやアザラシなど海の哺乳類に、人工放射性物質による汚染が全地球レベルで広がっていることが、愛媛県立衛生環境研究所の研究で分かった。海の哺乳類の筋肉中の放射性物質濃度が、海水中の濃度とほぼ比例することも判明。

(9月3日 共同通信)

#### ●泊原発で一次冷却水漏れ

北海道電力は、運転中の泊原発2号機の再生熱交換器室で、一次冷却水が漏れたと発表した。同原発での一次冷却水漏れは初めて。漏れた一次冷却水は計140リットル。

(9月7日 共同通信)

#### ●むつ市議会、住民投票条例案を否決

青森県むつ市議会は、市が誘致する使用済み核燃料中間貯蔵施設の建設の是非を問う住民投票条例案を否決した。これを受け、事業者の東京電力は青森県と市に対する立地協力要請の日程調整を本格化させる見通し。

(9月11日 河北新報)

#### ●再処理工場、操業開始1年延期を発表

多数の手抜き工事が見つかった青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場について、日本原燃は、操業開始を2005年7月から06年7月に1年間延期すると発表した。

(9月19日 時事通信)

#### ●東海村臨界事故4周年全国集会

「JCO臨界事故4周年全国集会」が、東海村の石神コミュニティセンターで開かれた。集会では、JCOに対する国の安全審査のずさんさがあらためて指摘されるとともに、国や核燃料サイクル開発機構の責任糾明と健康被害への誠実な対応などを求める集会決議が採択された。

(9月28日 茨城新聞)

#### ●MOX工場も操業延期へ

日本原燃は、使用済み核燃料再処理工場の操業開始を1年延期するのに伴い、プルトニウム・ウラン混合酸化物(MOX)燃料加工工場の操業開始についても1年程度延期する方針を明らかにした。

(9月29日 河北新報)

#### ●福島第一原発、圧力抑制プールに異物

東京電力は、定期検査中の福島第一原発2号機で、原子炉格納容器下部にある圧力抑制プールの中水中に、工事に使う足場用の鉄パイプやシートなどの異物が多数放置されているのが見つかった、と発表した。

(10月9日 共同通信)

#### ●他の原発プールにも異物

東京電力は、福島第一原発2号機の原子炉格納容器下部にある圧力抑制プールで異物が見つかったことを受け、福島第一、同第二、柏崎刈羽の三原発の6基を調べた結果、すべてで異物が見つかったと発表した。

(10月14日 共同通信)

#### ●浜岡3号機、シュラウドひび割れ再稼働

中部電力は、浜岡原発3号機の原子炉を起動し調整運転に入ったと発表した。3号機は再循環系配管溶接部に傷の兆候が見つかったほか、シュラウドで計324カ所のひび割れが見つかった。配管は取り換えたが、シュラウドは補修しないまま今後5年間運転しても十分な強度があるとの評価を出し、国も認めている。

(10月26日 時事通信)

#### ●もんじゅ専門委が最終報告書

1995年12月のナトリウム漏れ火災事故以来、運転を停止している核燃料サイクル開発機構の高速増殖炉「もんじゅ」の安全性を検討する福井県の専門家委員会は最終報告書をまとめた。運転再開のため核燃機構が計画している改造工事によって、「もんじゅは工学的に十分な安全性を持つ」と結論付けている。

(11月10日 時事通信)

#### ●核燃再処理費用19兆円

電力業界は、原発使用済み核燃料を青森県六ヶ所村に建設中の再処理工場で処理する事業の関連費用が、総額18兆9100億円に上るとの試算結果をまとめ、総合資源エネルギー調査会電気事業分科会の小委員会に報告した。

(11月11日 共同通信)

### <海外>

#### ●米、1年ぶり臨界前核実験実施

米エネルギー省は、ネバダ州の地下核実験場で臨界前核実験を約1年ぶりに実施した。1997年以来通算20回目、ブッシュ政権下では7回目。

(9月19日 共同通信)

#### ●米国の小型核兵器開発計画を批判

IAEAのエルバラダイ事務局長は、米ブッシュ政権の小型核兵器開発計画について、核兵器開発を模索している諸国に誤ったシグナルを送るものだと、厳しく非難した。

(9月24日 ロイター)

#### ●ロシア、核限定使用を検討

ロシアのイワノフ国防相は、ロシア軍最高司令官会議を開き、今後、核兵器の限定的使用を検討すると明記した軍事ドクトリン「ロシア軍近代化の指針」を発表、プーチン大統領に提出した。地域紛争や国際テロに対する小型核使用を想定しているとみられる。

(10月2日 共同通信)

#### ●IAEA、ウランなどの国際管理要請

IAEAのエルバラダイ事務局長は、国連総会に2002年の年次報告書を提出、一部国家やテロリストからの「増大する脅威」に強い警戒感を示した上で、兵器に転用可能な世界中のウランやプルトニウムをすべて国際的な管理下に置く必要性を訴えた。

(11月3日 共同通信)

#### ●東欧からロシアに高濃縮ウランを返送へ

旧ソ連時代、東欧諸国に研究用として送られた兵器級の高濃縮ウランを、米国政府の資金援助でロシアに送り返すプロジェクトを始めることに米ロ両国政府が合意した。

(11月8日 共同通信)

#### ●米、小型核兵器の研究承認

ブッシュ米大統領は、広島型原爆の3分の1程度である爆発力5キロトン以下の小型核兵器の研究開発を禁じた「ファース・スプラット条項」を廃止し、小型核の研究に道を開く2004年会計年度の国防権限法案(国防予算案)に署名、同法は成立した。

(11月24日 共同通信)

#### ●イラク駐留米兵、劣化ウランの急性障害か

イラク駐留の米軍兵士の一部で肺炎や皮膚疾患などが広がっており、急死する例も出ている。原因は不明だが、専門家の間では、米軍がイラクで使用した劣化ウラン弾が原因との見方が浮上している。

(9月4日 共同通信)

#### ●CTBT会議、米国などに早期批准呼びかけ

核実験全面禁止条約(CTBT)の第3回発効促進会議は、米国など未署名・未批准国に早期の批准・署名を呼びかける最終宣言を採択した。核大国の米国をはじめ、インド、北朝鮮などが欠席し、依然条約発効のめどはない。

(9月5日 毎日新聞)

#### ●IAEA、イラクに核計画なかった

イラクの大量破壊兵器疑惑の国連査察に参加した国際原子力機関(IAEA)は「1991年以降、イラクに核兵器開発の兆候は認められなかった」とする報告書をまとめた。

(9月8日 共同通信)

#### ●IAEA、イランに全面協力求める

IAEAの定例理事会は、イランに対し10月末までにIAEAへの全面協力を求めた決議案を採択した。イランはウラン濃縮計画の開示や、査察強化のための追加議定書調印・批准などを迫られることになった。

(9月12日 共同通信)

#### ●オゾン層減少、子供の健康に最大の危険

世界保健機関(WHO)と国連環境計画(UNEP)は、長期的なオゾン層の減少により皮膚がんにかされる可能性が最も高いのは子供たち、との報告を発表した。

(9月16日 ロイター)

#### ●統一経済圏設立で協定調印

ロシア、ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタンの4カ国首脳は、将来的な経済統合を目指す「統一経済圏」設立協定に調印した。協定は、統一関税導入や対外通商政策調整などをうたい、段階的に経済統合を推進するとしている。

(9月19日 時事通信)

#### ●IAEA、北朝鮮にNPT復帰要求

ウィーンで開催中のIAEA年次総会は、北朝鮮に核拡散防止条約(NPT)への復帰を促し、核問題の平和的解決を求める決議案を全会一致で採択した。

(9月19日 共同通信)

# こんにちは！

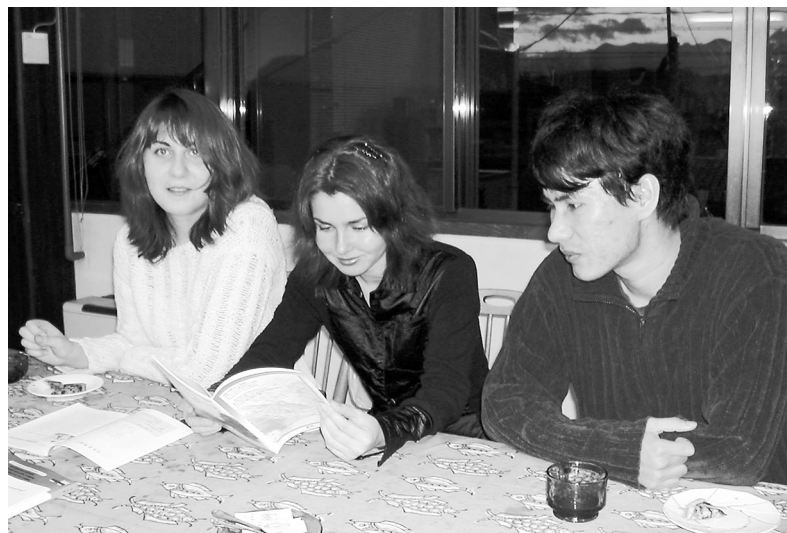
# Здравствуйте!

## カムチャッカとの交流を願って



の観光では飽き足らなくなった日本人は、彼女の案内なら、どっと押し掛けそうだと。  
 「まだ、日本人は漁業の人が多くです」  
 オレーシャさんは、「私は日本語の先生になります。日本語を教えることに興味があります」という。  
 大学では各学年35人。5年生まで、約150人が日本語学科で学んでいるそうだ。「日本の文化もすばらしい」

い。経済もすばらしい。日本人とカムチャッカの人たちももともと交流すればいいと思います」  
 二人が敬語を巧みに使うのを知っていると、日本語ってこんなに美しいんだね、と気づかされます。  
 「1年間は短いです。私は、歌舞伎を見たい」  
 「私は、たくさんのお店をみたいですね」  
 二人の美しい留学生の日本体験を応援しつつ、一層華やかな事務局を目指します今日この頃です。



左からオレーシャ・フラバータヤさん、アーリヤ・スピリーナさん、タスマガンベトフ・ガニさん

カムチャッカ大学から、信州大学に交換留学生としてやってきました。  
 アーリヤ・スピリーナさんとオレーシャ・フラバータヤさんです。  
 「日本の文化はとても面白いですが、ヨーロッパには全くない。伝統的なお茶やお花、漢字はとても難しいけど、面白いです。何度も何度も繰り返して書いて覚えています」  
 二人とも流ちょうな日本語で、楽しく話してくれました。カムチャッカは温泉もいっぱいあって、冬はスキーが盛んです。ロシア全土から若者たちがスノーボードをしにやってくるそうです。  
 「温泉と言っても日本式じゃないでしょう。ロシアサウナ？」  
 「プールのように、水着を着て、男の人も女の人も一緒に入ります」  
 火山帯が走り、湯量も豊富。スキーの後の温泉プールはすごい。アーリヤさんは、通訳を目指している。普通

絵の心 HEART OF THE PAINTINGS

千住博



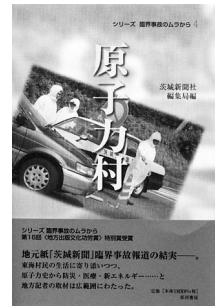
絵の心 HEART OF THE PAINTINGS
著者：千住博
発行：世界文化社
定価：2200円＋税

Book

日本画家・千住博による初の書き下ろし画文集。『本文より』じつはこの取材とほぼ同じ時期に、世の中では旧ソ連のチェルノブイリ原発で未曾有の重大事故が起こっていた。人類全体が自ら信じてきたモダニズムによって、まさに地球全体が大きな危機に直面しているときだったのだ。わたしはこのことを、このモチーフを通して描きたいと考えて、『ジ・エンド・オブ・ザ・ドリーム』という作品の連作によって表現した（中略）その名のおり夢の終わりとして描かれたシリーズは、一瞬にして巨大な光によって包まれ、すべてのが吹き飛んでしまう、その瞬間を描いたシリーズ、愛も夢も希望もロマンも、次の瞬間には灰色の粒子のようなものになって、その大きなエネルギーによって吹き飛ばされて終わってしまう。そのような爆発の瞬間を描いた絵なのである。（P.95～96）

原子力村

茨城新聞編集局



原子力村
編著者：茨城新聞編集局
発行：那珂書房
定価：1800円＋税

Book

「シリーズ 臨界事故のムラから」の第4弾。日本の原子力発祥の地、3人に1人が原子力産業の関係者といわれる「原子力村」の地元報道機関は臨界事故をどう伝えたか。臨界事故の翌年（2000年）1月から9月まで80回にわたり地元紙「茨城新聞」に連載された「原子力村」を単行本化。

東海村「臨界」事故

槌田敦＋JCO 臨界事故調査市民の会



東海村「臨界」事故
編著者：槌田敦＋JCO 臨界事故調査市民の会
発行：高文研
定価：1000円＋税

Book

本書の副題は「国内最大の原子力事故・その責任は核燃機構だ」。犠牲者2人を出し、667人を被曝させ、31万人を避難させた臨界事故はどうして起こったのか。「臨界」の起こった経過を追い、隠されていた事実をもとに、核燃機構の責任（無理な注文）を明らかにする。

「イラク戦争」の30日

豊田直巳



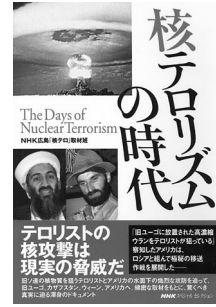
「イラク戦争」の30日
著者：豊田直巳
発行：七つ森書館
定価：1800円＋税

Book

米英軍による空爆にさらされ続けたイラク市民を追ったフォト・ルポルタージュ。イラクへの空爆が開始された2003年3月20日、ブッシュ大統領がフセイン大統領に突きつけた「48時間亡命期限」の切れたその時、著者はイラクへ入った。しかし「48時間」が切れる数時間前、すでに犠牲者は出ていた。

核テロリズムの時代

NHK広島「核テロ」取材班



核テロリズムの時代
著者：NHK広島「核テロ」取材班
発行：NHK出版
定価：1700円＋税

「9・11テロ」は核をもつのが「国家」であるという常識さえ破壊した。旧ソ連に放置された核物質を狙うテロリストと、これを阻止しようとするアメリカの水面下の熾烈な攻防に迫る。核密輸の実態を追って、カザフスタンの核施設や旧ユーゴでの米露による極秘ウラン移送作戦などを取材したドキュメント。

医者よ、信念はいらぬ まず命を救え！

中村哲



医者よ、信念はいらぬ まず命を救え！
著者：中村哲
発行：羊土社
定価：1800円＋税

「まず、生きることだ」そう言っ、大早魁のアフガニスタンで井戸を掘り始めた医師、中村哲。アフガニスタンとパキスタンの無医地区で難民の診療を続けること20年。現地において最大級の敬意を受ける中村医師が掘り上げた井戸の数は千に及んだ。医療NGOベシャワール会の現地代表として、その活動に全身全霊を捧げ続ける中村哲医師からの熱きメッセージ。



第 58 号

発行日 2003年 12月 26日

発行人 鎌田寛

発行所  
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原浩

イラスト 武内裕子

重岡朱

表紙デザイン 酒井隆志

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

重岡朱

高橋俊光

佐内裕之

印刷 電算印刷

松本市筑摩 1-11-30

■編集後記

マリアちゃんの悲報に打ちのめされた日、「パン屋を見守る息子（しょうがい者）が30才になりました。目に見えるもの見えないものに感謝します」というメッセージを添えて、特別賛助会費が届く。この方はマリアちゃん支援に率直な苦言を寄せてくれた方でもある。未来の見えないベラルーシと未来を踏みこむ選択をする日本政府、JCFの今後を決めあぐねる年の暮れに永井隆賞受賞の通知が届く。ここぞという時に差し出されるたたくさんの手に後押しされて、来年も支援を模索していきたい。どうぞ良い年をお迎えください。(布山)

■事務局日誌■

10月

- 2日 マリアちゃん移植日
  - 7日 マリアちゃん移植渡航帰着
  - 8日 「チェルノブイリの祈り」 イベント・スタッフミーティング
  - 10日 NPO 学習会 (中央公民館)  
ロシア語講座
  - 15日 「チェルノブイリの祈り」 イベント (あがたの森文化会館講堂)
  - 16日 NGO 報告会 (松本文化会館)
  - 17日 NGO 報告会 (茅野郵便局)
  - 21日 NPO サポートセンター就労事業
  - 23日 北海道上川町民生委員研修 (浅間温泉)
  - 24日 ロシア語講座
  - 25日 ME ミーティング
  - 28日 NGO 支援事業 JICS (新宿)
  - 29日 アロマライフ安曇野  
本郷消防署点検  
武蔵工大付属第二高校生来局
- 1,2,3,6,8,9,10,13,14,15,16,17,22日:  
ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信 (信州大学)

11月

- 3日 泉ツアー松本支部会
  - 6日 サーシャさん来局
  - 7日 ロシア語講座
  - 12日 中島ゼミで講演 (信州大学人文学部)
  - 13日 アルプスフロント懇話会 (M ウィング)
  - 14日 NPO 学習会  
ロシア語講座
  - 17日 社会教育委員会講演  
長野県 NPO センターから成田さんが研修 (20日まで)
  - 21日 ロシア語講座
  - 25日 第72次訪問団出発 (12月2日帰着)
  - 28日 ロシア語講座
  - 30日 外国人検診に協力 (協立病院)
- 5,12,19,26日:  
ミンスク・小児血液がんセンターとの衛星通信 (信州大学)

JCF/日本チェルノブイリ連帯基金

●本部 〒390-0303  
長野県松本市浅間温泉 2-12-12  
TEL 0263- 46- 4218 FAX 0263- 46- 6229  
E-mail jcf@jca.apc.org  
Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003  
東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付  
TEL03- 3227- 1405 FAX03- 3227-1406  
●京都 〒607-8405  
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3  
TEL075- 591- 7772

上映予定  
アレクセイと泉  
Алексей и Крыница

上映日	上映場所	問い合わせ先・備考
・1/31(土)	埼玉県 狭山市富士見公民館	042-959-3419(橋本)
・2/8(日)	東京都 板橋区立エコポリスセンター	03-5970-5001 監督参加
・2/14(土)	神奈川県 南足柄市文化会館	0465-74-2777(高橋)
・3/25(木)	神奈川県 海老名市文化会館	監督参加

※上映予定は変更になることがあります。  
サスナフィルムにご確認下さい。

情報提供・サスナフィルム (03-3227-1870)

第5回「永井隆平和記念・長崎賞」受賞決定!

長崎市の「長崎・ヒバクシャ医療国際協力会」が主催する「永井隆平和記念・長崎賞」は原子爆弾による被爆者と放射線被曝事故等による被災者に対する治療及び調査・研究等の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じ世界平和に貢献し、将来にわたる活躍が期待される国内外の個人または団体に隔年毎に贈られます。JCFが第5回永井隆賞を受賞することが決定しました。

永井隆氏は、1945年8月、長崎医科大学で原子爆弾により重傷を負いながら、被爆者の救護活動に挺身しました。翌年、同大学の教授となったが、白血病に倒れ、病床で「この子を残して」、「長崎の鐘」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けました。その崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えています。

これまでの受賞者は 第1回：秋月辰一郎、第2回：サイム・バルムハノフ、第3回：ヨハネス・ヤコブ・プローセ、第4回：デミチュック・エヴゲニイ、鎌田七男のみなさんです。

この名誉ある賞を受ける喜びをJCFを支えてくださった全てのみなさまと分かち合いたく、受賞決定の速報をお知らせ致します。